





蝶  
巫

京師 西川 祐信 畫圖

山水 草木 人物 禽獸 詩歌 連俳 狂哥

# 繪本倭比事

屏風 襖 衝立 卷物 掛物 繪馬 時繪

平安 書林二鳩堂壽梓

畫本倭比事序

天之高也。日月星辰之繁一各々

也。文綴以摸之。輿地之廣

也。人物之繁也。卉木鳥獸

之有文也。彩色以寫之。吐

曜於<sup>テカ</sup>是乎可<sup>ニ</sup>觀<sup>ル</sup>含章於<sup>テカ</sup>日延<sup>ニ</sup>  
乎可<sup>レ</sup>察<sup>ス</sup>此<sup>ニ</sup>畫<sup>ニ</sup>圖<sup>ニ</sup>孰<sup>カ</sup>能<sup>レ</sup>與<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>  
畫<sup>レ</sup>之<sup>ル</sup>為<sup>ル</sup>用<sup>也</sup>也<sup>ナ</sup>吁<sup>ナルカチ</sup>大<sup>ニ</sup>矣<sup>ニ</sup>哉<sup>ニ</sup>洛  
京<sup>レ</sup>西<sup>レ</sup>川<sup>レ</sup>祐<sup>レ</sup>信<sup>ニ</sup>近<sup>レ</sup>歲<sup>ニ</sup>有<sup>レ</sup>會<sup>ニ</sup>畫<sup>ニ</sup>  
之<sup>ニ</sup>名<sup>ニ</sup>具<sup>レ</sup>所<sup>ニ</sup>圖<sup>スル</sup>之<sup>ニ</sup>短<sup>ニ</sup>篇<sup>ニ</sup>小<sup>ニ</sup>策<sup>ニ</sup>

雖<sup>ニ</sup>適<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>流<sup>ル</sup>于<sup>ニ</sup>世<sup>ニ</sup>而<sup>レ</sup>未<sup>ダ</sup>嘗<sup>テ</sup>有<sup>ル</sup>  
具<sup>テ</sup>紙<sup>ニ</sup>葉<sup>ニ</sup>重<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>而<sup>レ</sup>為<sup>ス</sup>全<sup>ニ</sup>璧<sup>ニ</sup>者<sup>ニ</sup>  
化<sup>ヤ</sup>亦<sup>ニ</sup>欠<sup>ニ</sup>事<sup>ニ</sup>耶<sup>ニ</sup>汨<sup>レ</sup>華<sup>ニ</sup>書<sup>レ</sup>坊<sup>ニ</sup>管<sup>ニ</sup>  
主<sup>ニ</sup>堂<sup>ニ</sup>祐<sup>レ</sup>佐<sup>レ</sup>子<sup>ニ</sup>深<sup>ニ</sup>憾<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>此<sup>ニ</sup>道<sup>ニ</sup>  
假<sup>ニ</sup>其<sup>テ</sup>手<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>製<sup>ス</sup>槧<sup>ニ</sup>本<sup>ニ</sup>其<sup>レ</sup>編<sup>ニ</sup>率<sup>ニ</sup>

描出乎名勝絕景及高人  
英雄名姬韻士之肖像  
注曲故事實題曰畫本味  
比夏冀世之學畫者正以  
是為榜樣又婦人童習者

或以為消閑之奇玩也於  
戲西川氏之功已為美而  
祐佐子之意亦勤美予也  
於坊人習多年之舊因叙  
其發行之由稍綴舊語以









百馬之圖

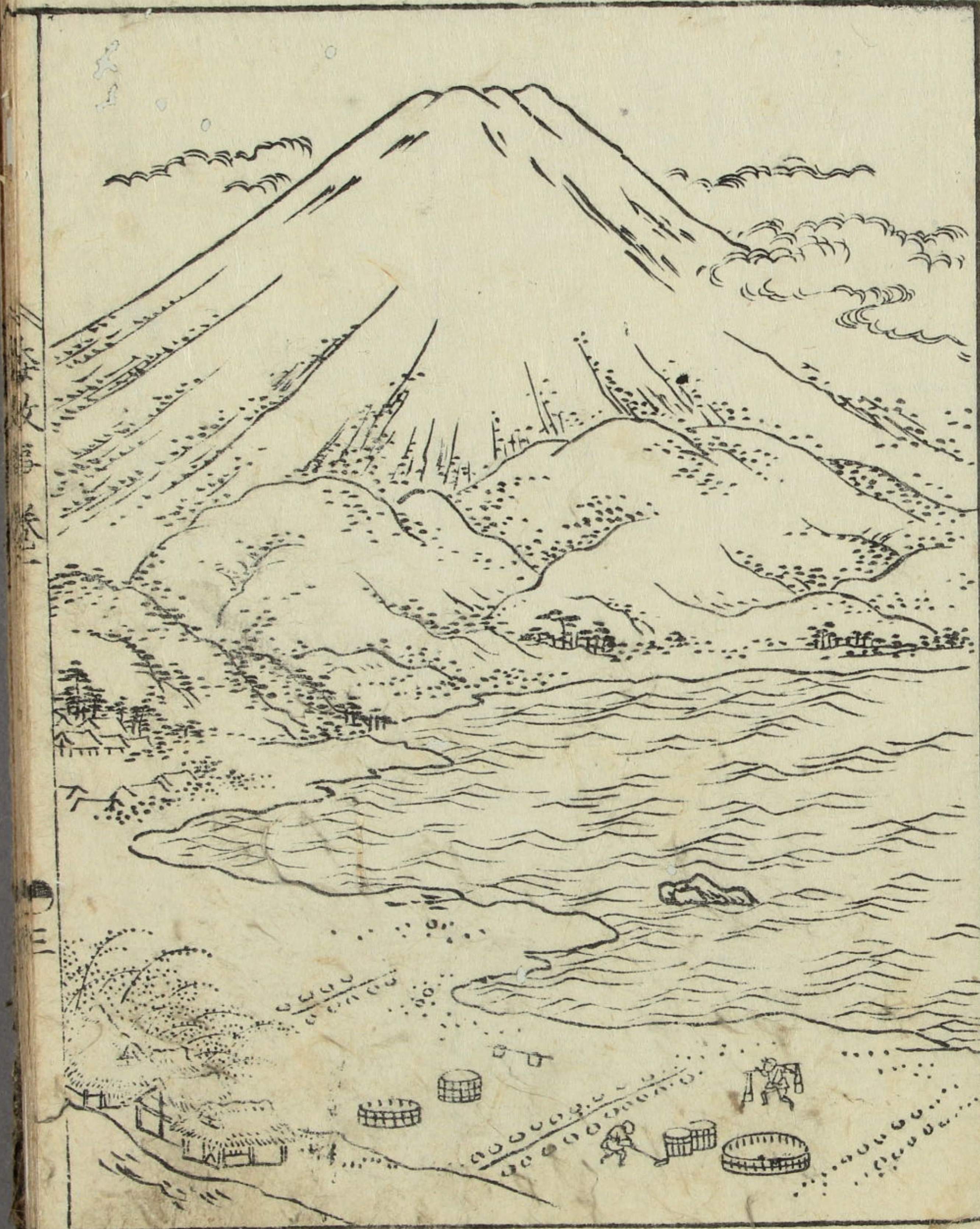
百猿之圖

百牛之圖

繪本和比事卷之一

富士山 不二不盡共同

先富士の奇山なり事日が軽ハハふ及び流澤紅やハへも文  
 小者とふべき形は、あはれの韓人詩文に奉答するの詞に  
 よいゆありども、枕中昔園に人書とあり、補やねく、詩の  
 好むひとなりて、目眩にびり、あをさげとさめすといふるなり、  
 不日中言ふ山は、一あり。三園世雙乃名山也  
 垣海池頂より、あまや九里余、あまや、く、斗るん  
 其言と武拾五丁余なりやとや



風推雜 中宮権大納言

ふらねハ

雪の中少も

ゆりれく

うばもれ

ぬあし

ふらね

海物語卷

海物語卷



山を難 砥浦

よもぎ

ふたのうね

いづ

せう

はる

日影

後古事記

水湖根の宮



徳川幕府

徳川幕府

徳川幕府



徳川幕府

五

平家秋

平家宣於此

古事

清見

の

ハ

い

り

り

り

り

サガ

キ



浦  
松  
名

イ  
ツ  
サ  
キ

清見寺



田子浦の圖



田子の浦

つゆのふく

うら

かほの

かほ

ま

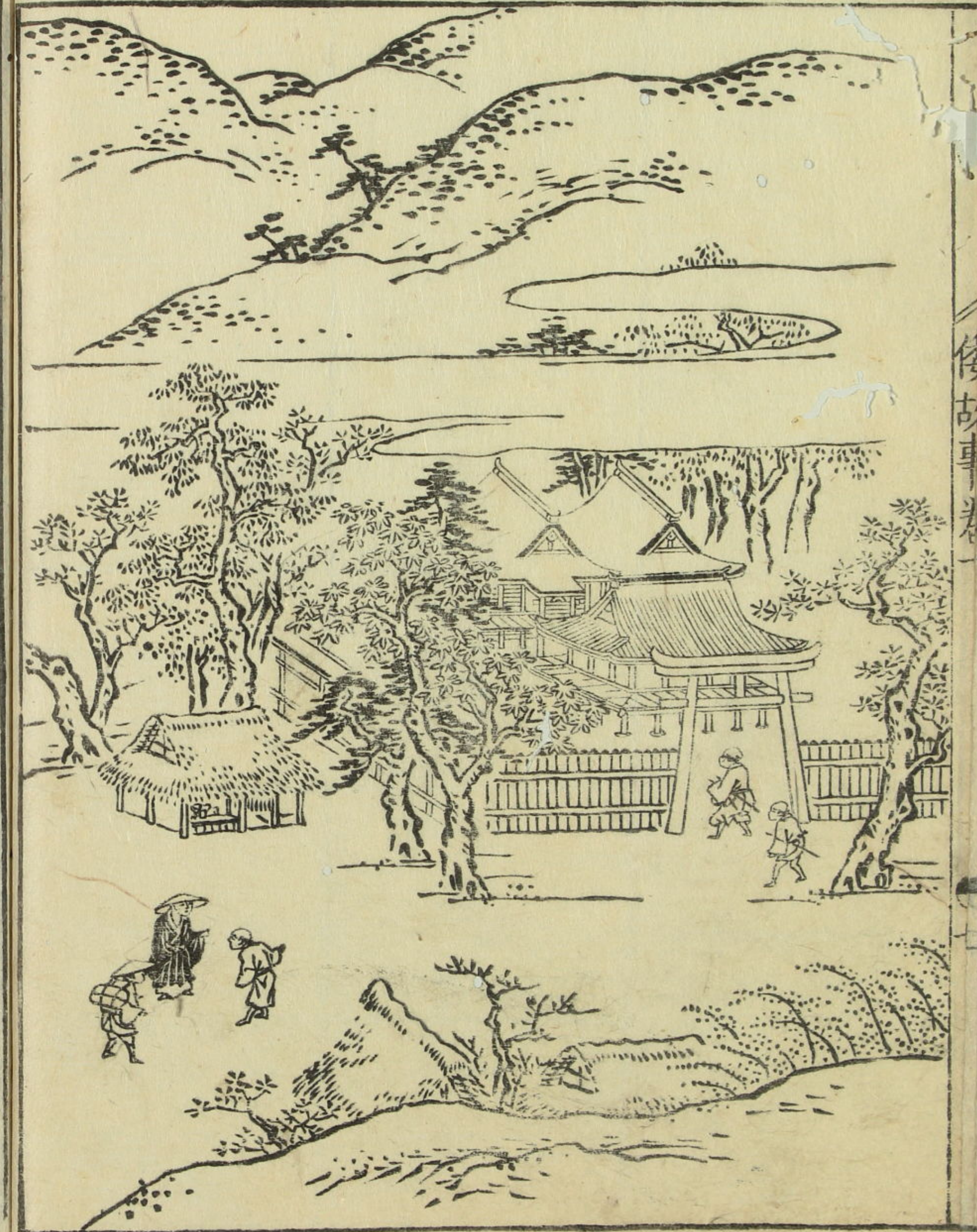
え

拾遺雜春

大中臣経基

海防車巻

龍田峯川圖



後撰卷一

龍田川

後撰秋

貴之

山あり

りこ

秋あり

水あり

ふりあり





鳴門門圖

鳴門の  
船を  
見



鳴門の  
船を  
見

新千載恋

壬生忠見

鳴門の  
船を  
見  
鳴門の  
船を  
見  
鳴門の  
船を  
見



鳴門の  
船を  
見

新六歌仙の圖



九一 後京極坊

じうしうか

さうじうか

う

の

う

の

う

の

う

の

右一 並結和為

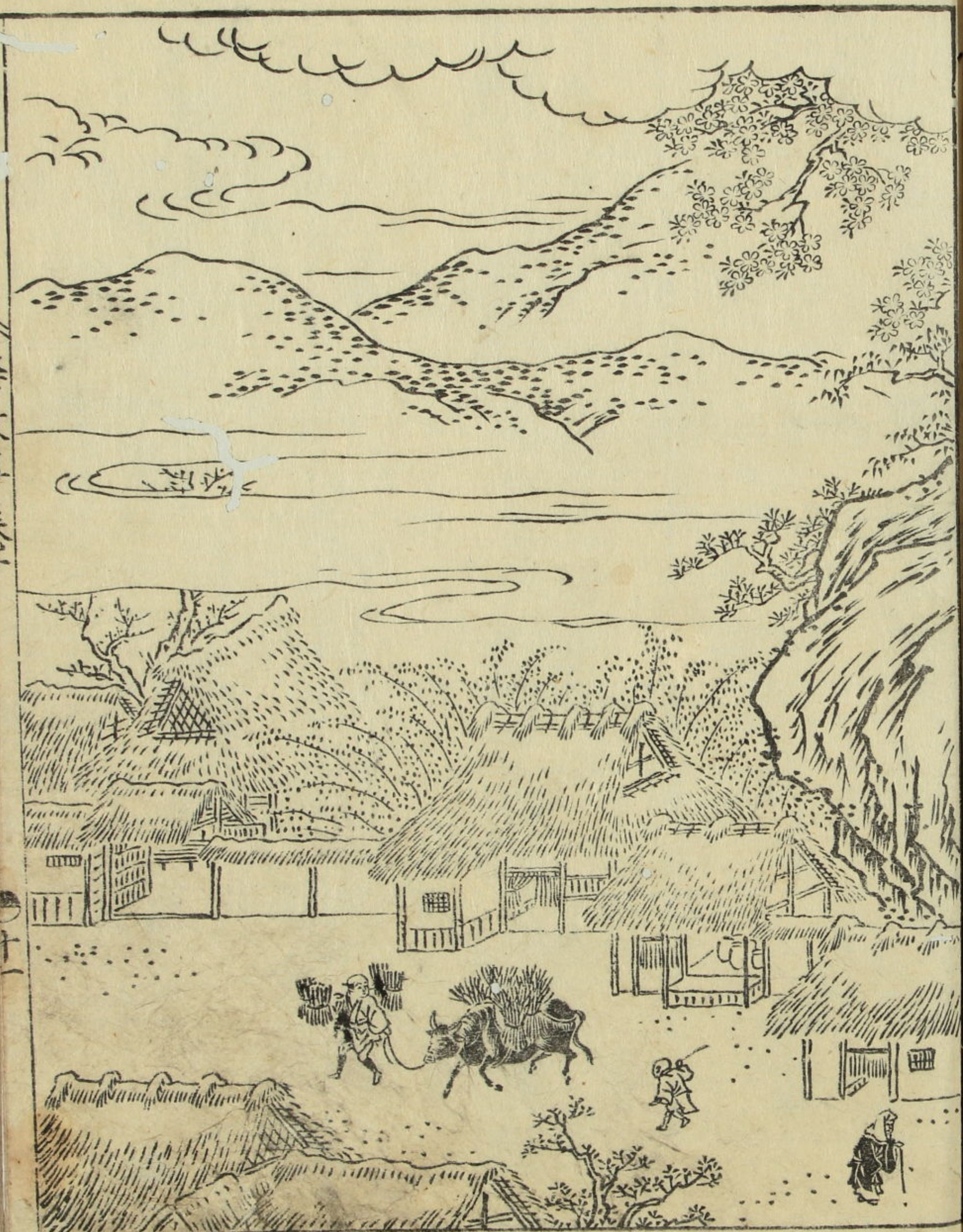
あつちの

山すうこ

平原

さあ

うす





徳人の  
 立あ  
 乃  
 さくがき  
 光を  
 子代  
 右

右二  
位  
家  
隆



徳  
古  
車  
卷

九三

桂中地之定家

出ろ

日

に

ひり

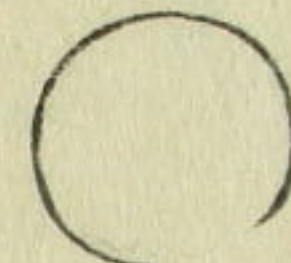
四の

海

浪



乃 云 乃 乃



修 高 車 卷



三々夕一る躰づ圖



橋の秋の夕

あはれハ  
あはれハ  
あはれハ

れく夕れ秋のほ



寂達  
の夕

あはれハ  
あはれハ  
あはれハ

傳故事







龍の川布

千載

六条右大臣

水の多ハ

龍の川の

よさ

よ



茶女書

十九

海古事

春水満る四澤

明題

松河法師

柳の影をかくるは河邊  
あや花田はゆがみ見ゆら



後  
故  
事  
卷

夏 雲 籠 奇 峯



倭 古 華 卷



夕立の風雅  
浪系極振故  
山の  
たれて  
りる

茶 文 華 卷

十一

秋の月明輝

千載

宗法侯

玉

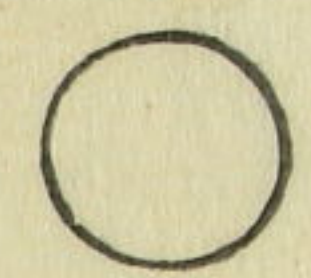
の

浦の

風

の

の



の

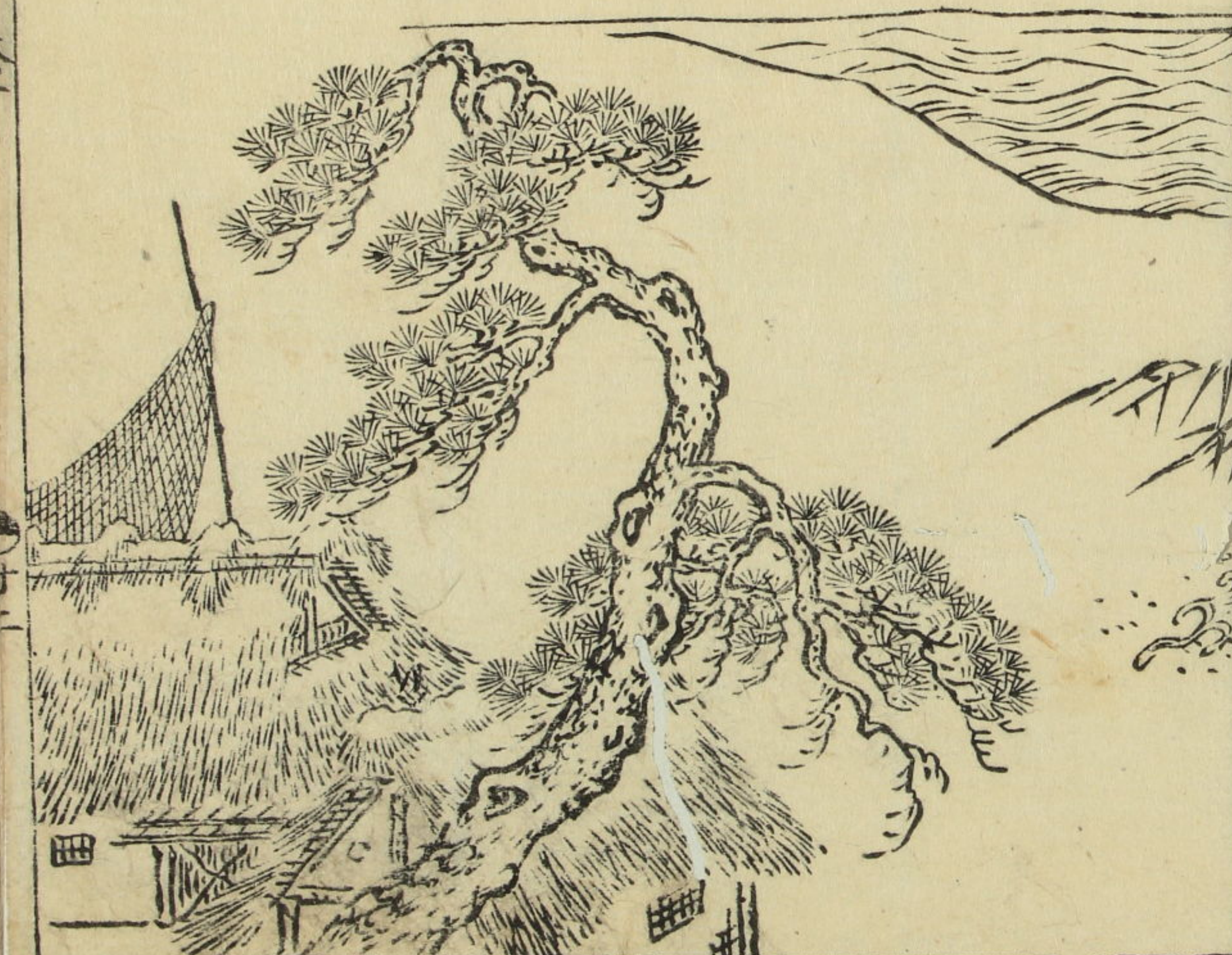
の

の

秋

の

月



傳  
故  
事  
卷

十一

冬嶺秀孤松



そのまゝ  
山  
のふ  
松  
さぎ  
ま  
ふり  
よの  
ま

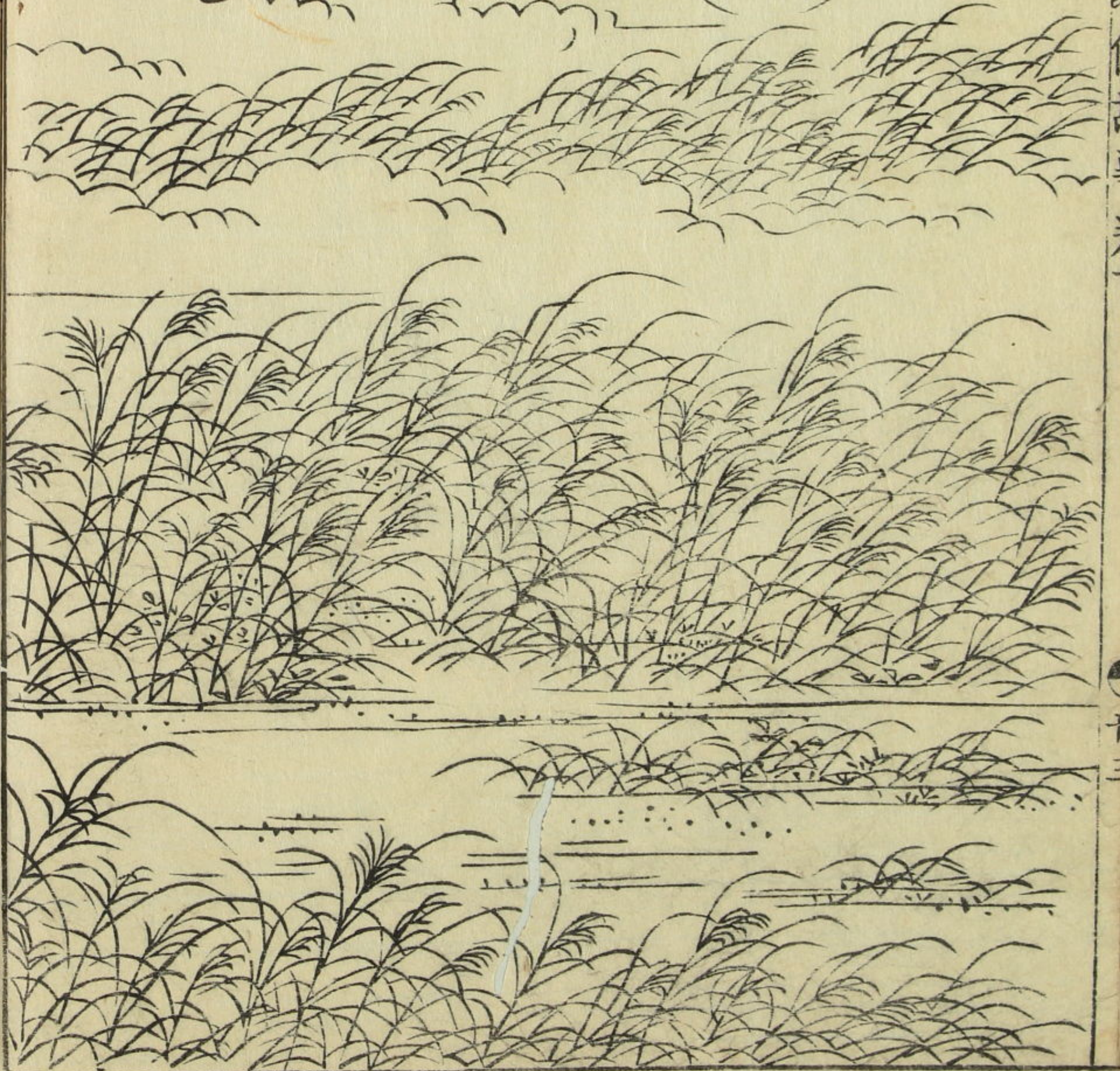
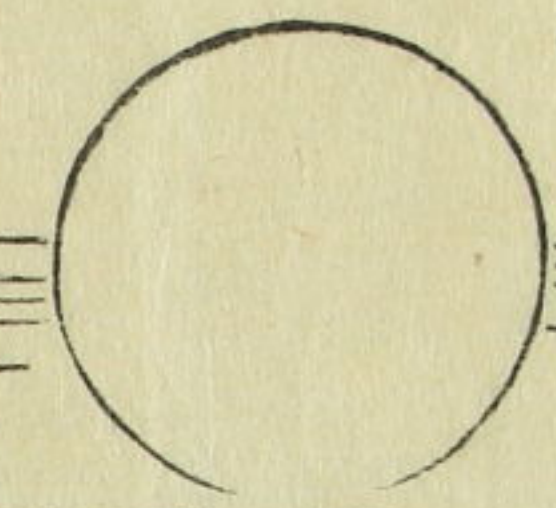
新古今  
証ア成伴

俳諧集

廿二

武蔵野月

うか  
そ



徳政草巻

十三

ひ  
おどろ  
か  
山  
月  
の  
入  
る  
ま



續古今秋

大御通方

徳政草巻

十四





瀬初

後子戦

由大

どのらん

れんしや

らんき

あ

の

れ

ま

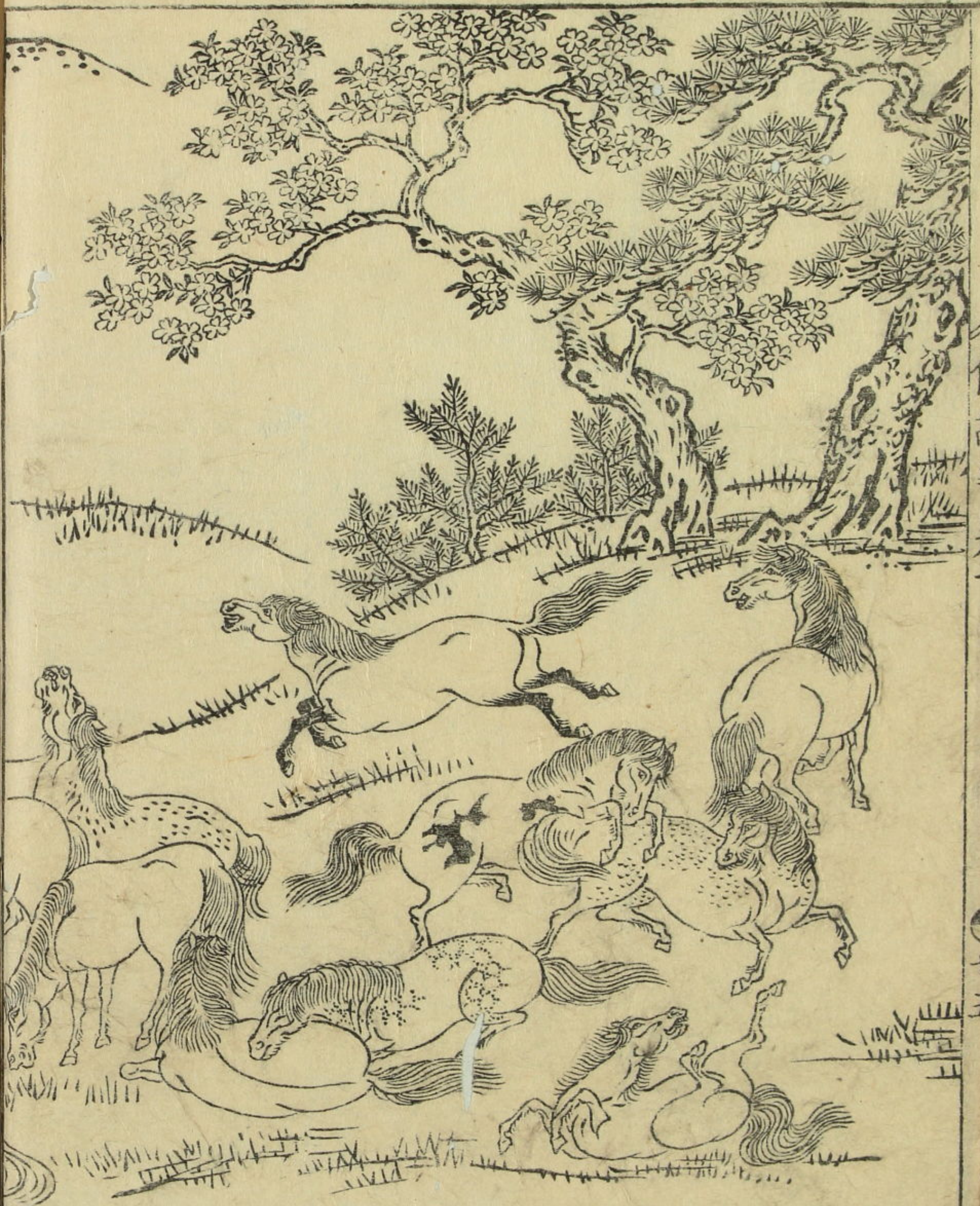
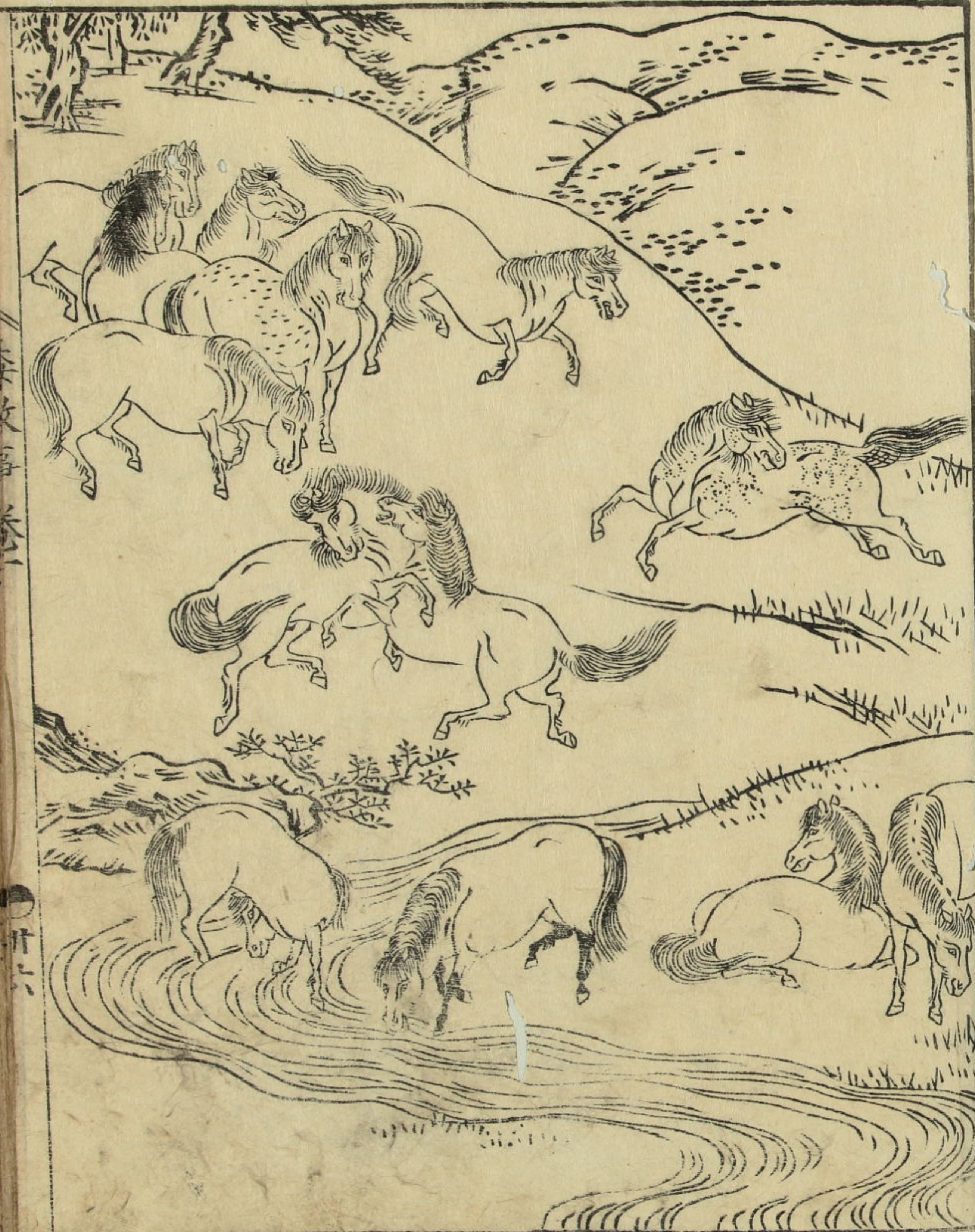
ま

ゆ

御古車巻



百の馬の圖



傳  
故  
華  
卷

十  
五

百牛圖



卷之二



御製

五

百猿圖



卷之二

十八

卷之二

十八



佐田氏

繪本味比事卷之二

目録

業平  
貫之  
和泉式部  
俊成  
隆尊  
京月坊  
菅原相

小町  
赤深邊  
能因法師  
定家  
足依寺  
半者川浪  
長谷雄

佐田氏







やのひりしりのありりり控矣説匿くりれば者聚也

貫之

孝元天皇末武内宿称十代苗裔也紀本道孫望行子云

紀貫之ハ由書亦成於土佐守り任ぢ乙姉和  
おをよそ延喜の物つとく吉々和おを糸成  
あらみ他名の序文をけりて世上り名譽成  
妹中少中物るの序文乃権輿ありて後世乃  
親類やまゆてくし後の考お尋うくのどと  
—世ごらうお他を稱ぢ  
さうら地方あつたせわささうら  
さうらあうまぬ雪が降る





人ひさし  
おまわ

あまの  
ひびの

赤染衛門

あかぞめあかり  
あまのあかり  
作者

和泉式部

いづこきさぶ  
号弁内侍  
何上東門院女房

中納言定頼は、何上東門院女房大納言を小回し、いさく式部  
 部や赤染衛門の事、いさく式部をいさく式部とい  
 一口の論は、いさく式部は、いさく式部といさく式部とい  
 へ、いさく式部といさく式部といさく式部といさく式部とい  
 深共、いさく式部といさく式部といさく式部といさく式部とい  
 考、いさく式部といさく式部といさく式部といさく式部とい  
 如、いさく式部といさく式部といさく式部といさく式部とい  
 ハ、いさく式部といさく式部といさく式部といさく式部とい



山のおん  
 らの  
 の  
 めを  
 わり  
 け  
 り  
 け  
 け



山のおん  
 らの  
 の  
 めを  
 わり  
 け  
 り  
 け  
 け

後物語卷二

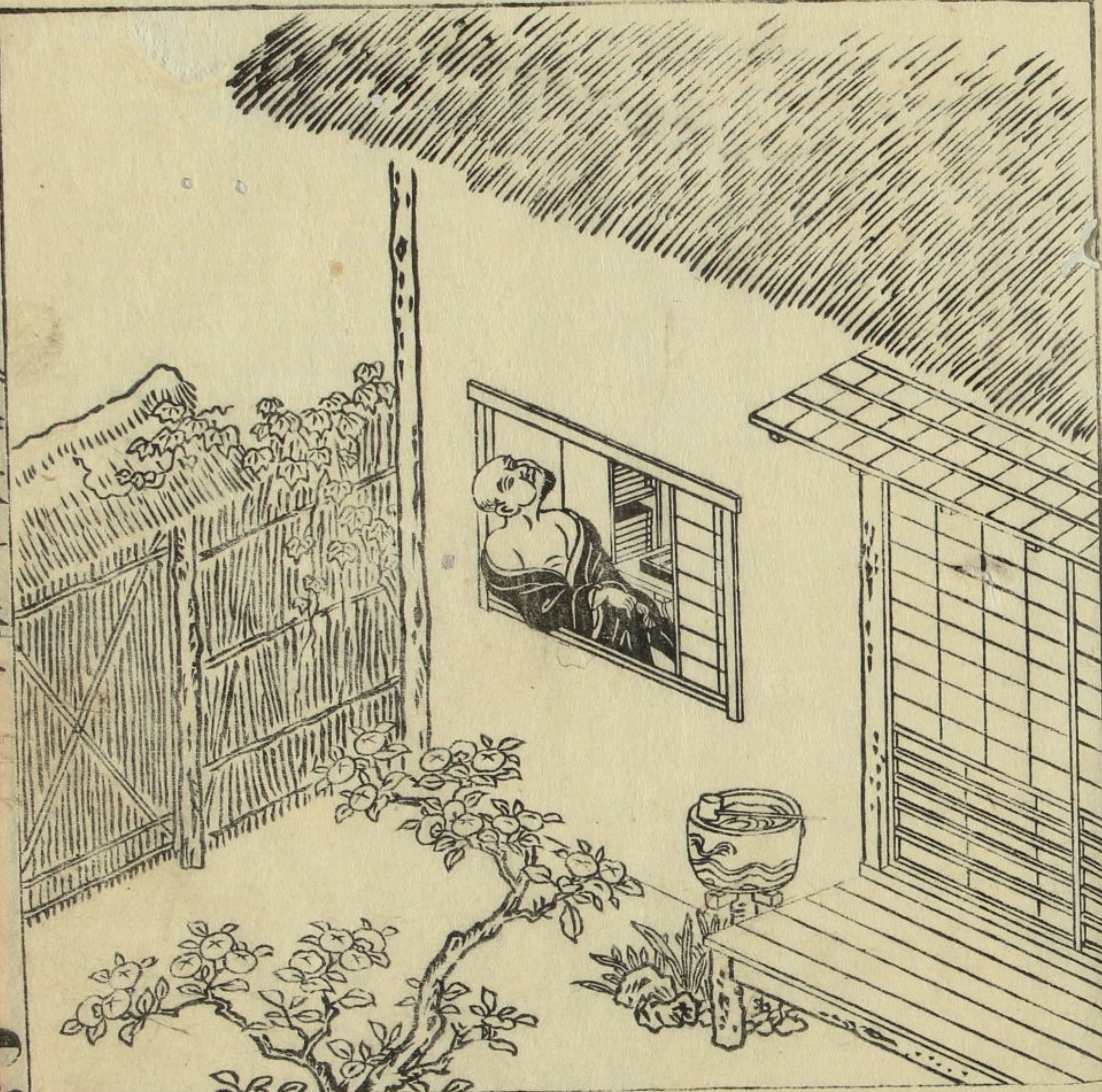
五

能因法師

橋諸兄公末橋忠望孫肥後守元愷子号古曾部入道

能因の志和安を好みて終よ家人の解を信じて或時和  
安を極め

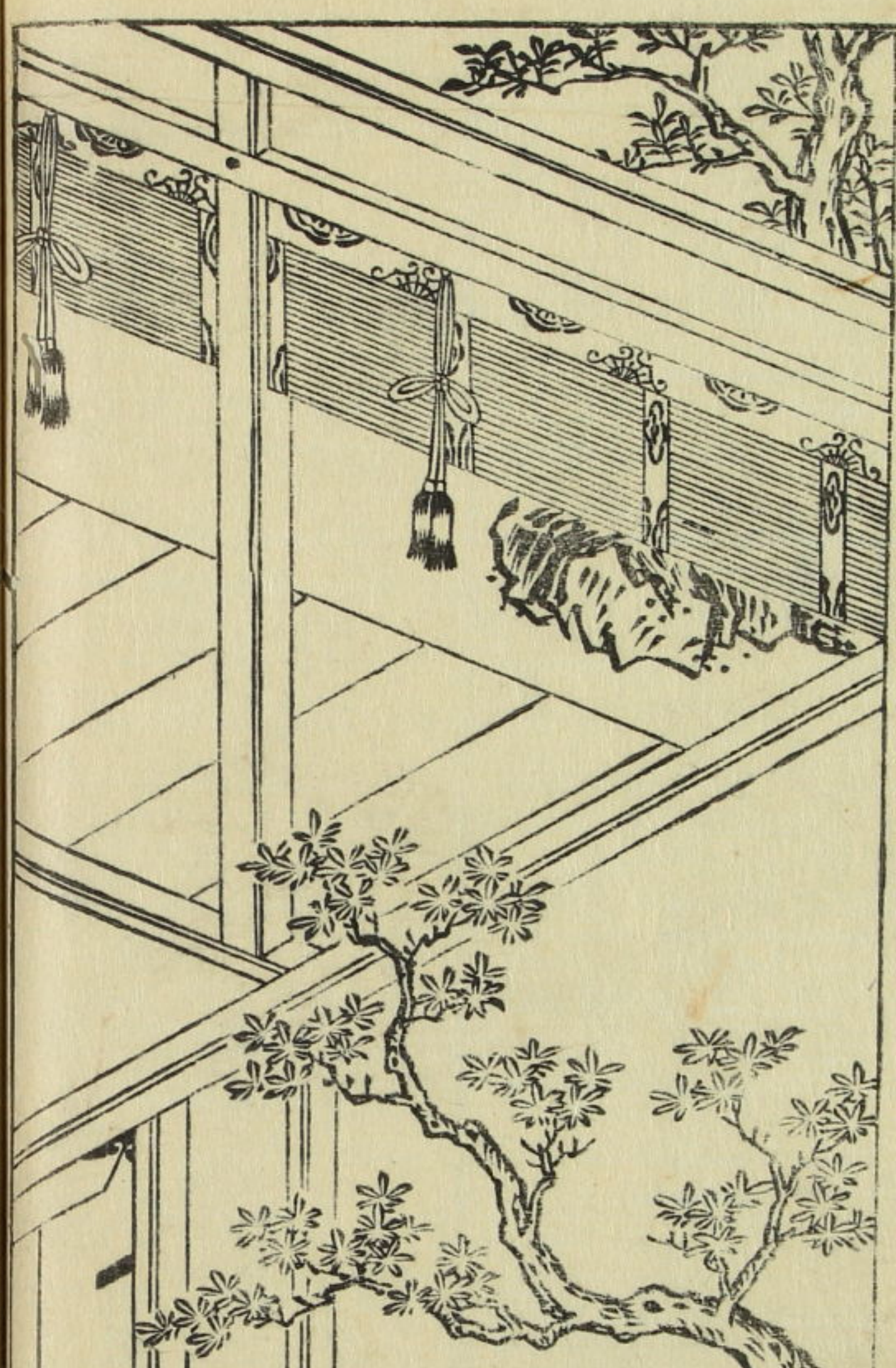
能をハ極むと申すにがど秋風ぞよく白河に  
比あゆま叶へりと思へど終らぬせん事乎念り  
として契列下向ののりをゆたし一室より  
より路をわいて日は暁一敷日就終て後  
陣系せし中をいひくけ安をせよと申す  
其後安よ下向して八十卷の記を著し又  
いらいの安よ  
ぐりぐり時口月まであつぐりぐり  
その門よりあはせさるるを  
かやうと極む  
たりれば天  
御文やお見  
終る大なる  
ごりく極む  
ほひたまふ  
まろくび極  
かや



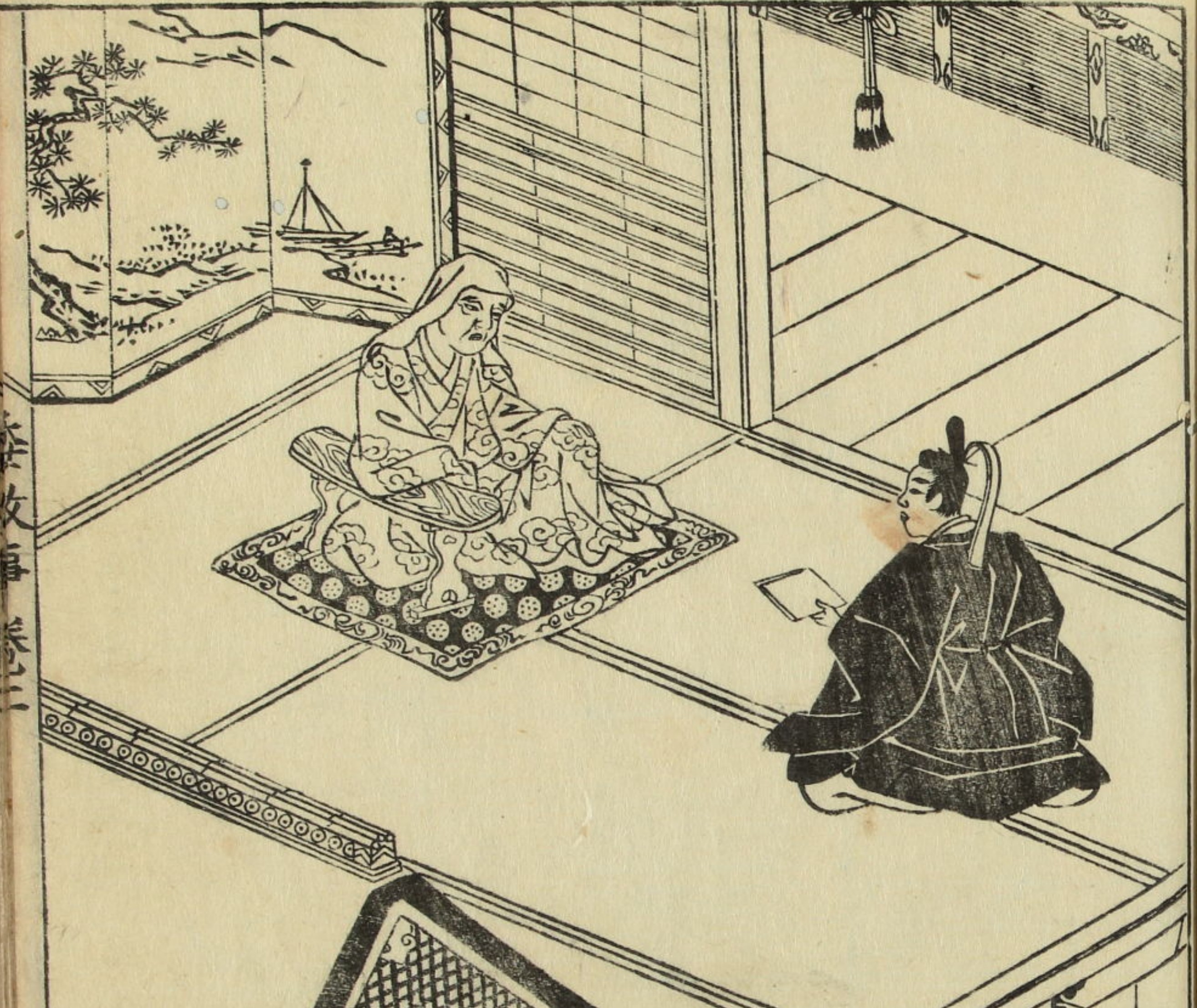


定家 五條三位俊成卿子也法名明静享年八十歳

柁中彼を定家俊成は依りハ昔二十れ法寺でハ  
老いも依りひり一が早乃そりそりし習ふふして  
頼りの方れられりいれり一のりを習ふべきやと



母ねたまひけれバ  
父の心もへよ母乃  
亦もがあふはん  
ふ海あがりぬれ  
はりく肉は  
よまてはわすれ  
と書をばりそり



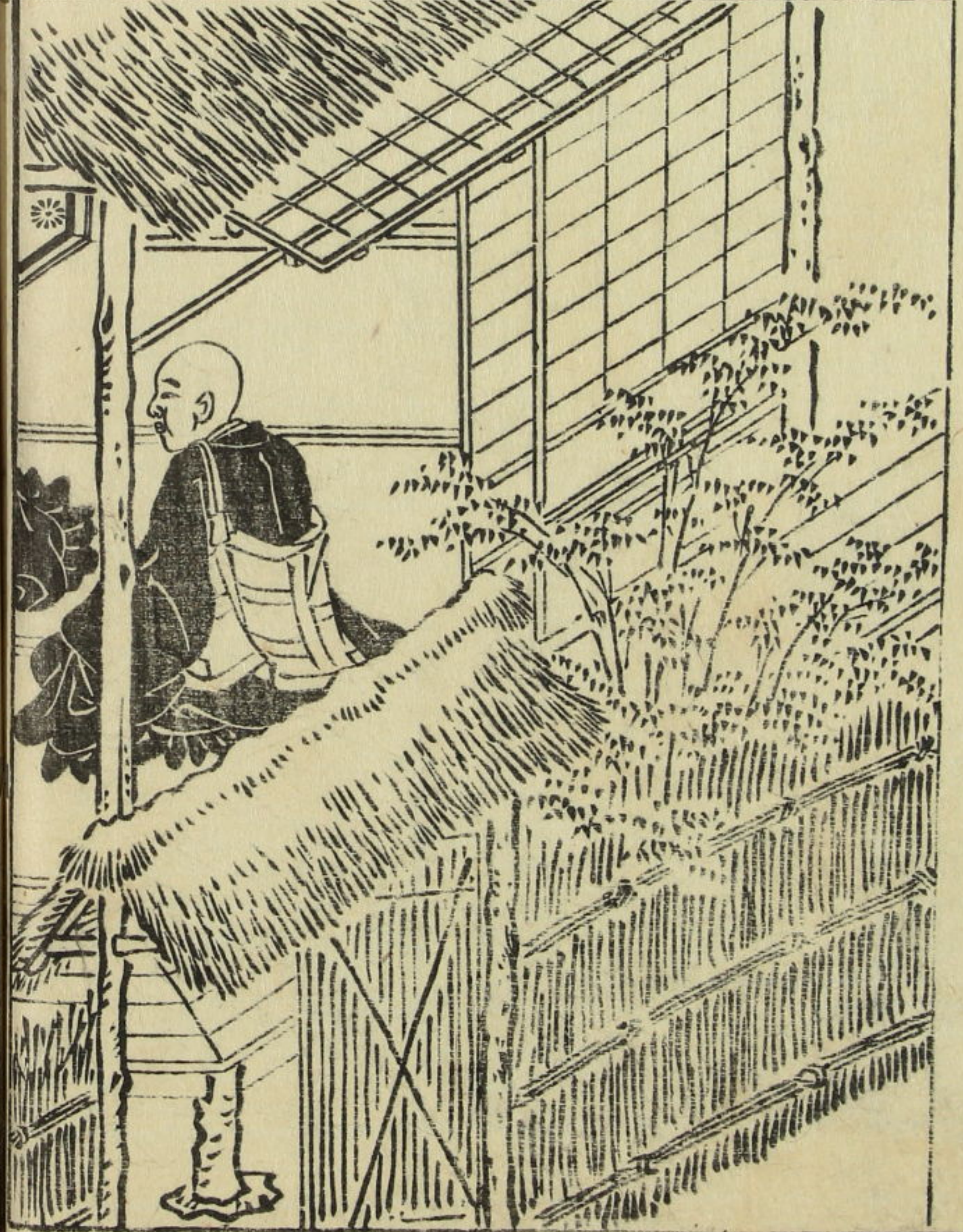
是を我之里へも  
八旬始をよりいふ見  
物ハ昔身一の事  
かりいふもい俊成  
玉乃世と独あり  
人さばべしと依り  
されバ小念の心  
して百々乃色  
或は横所と後世の  
徳とハあまひ  
りり

隆尊

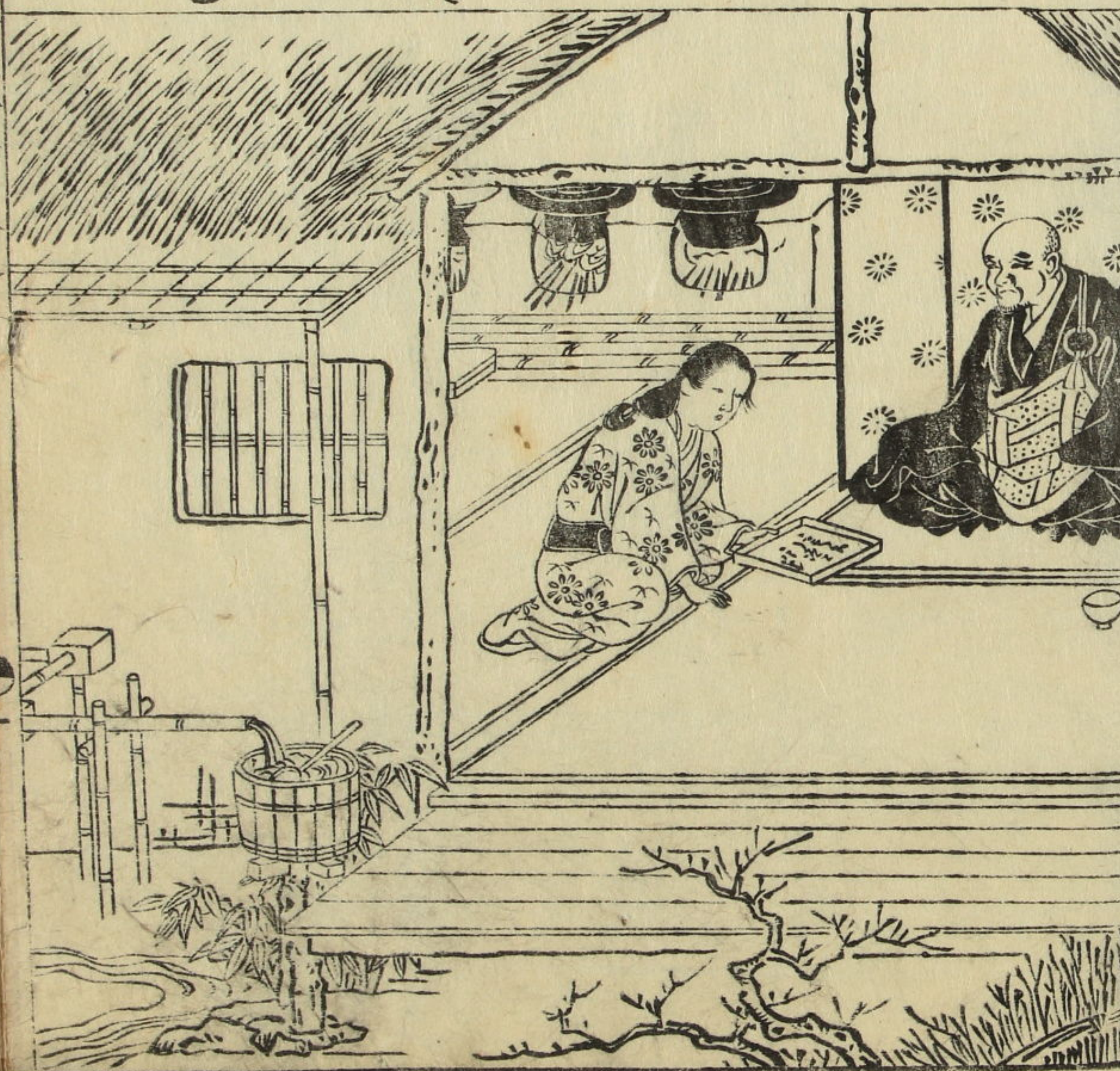
壬生二位家隆卿子也

隆尊隆尊方了修りせんそ同好き人かして  
あり里よりりるるくゆやげらる小あし使子一段成

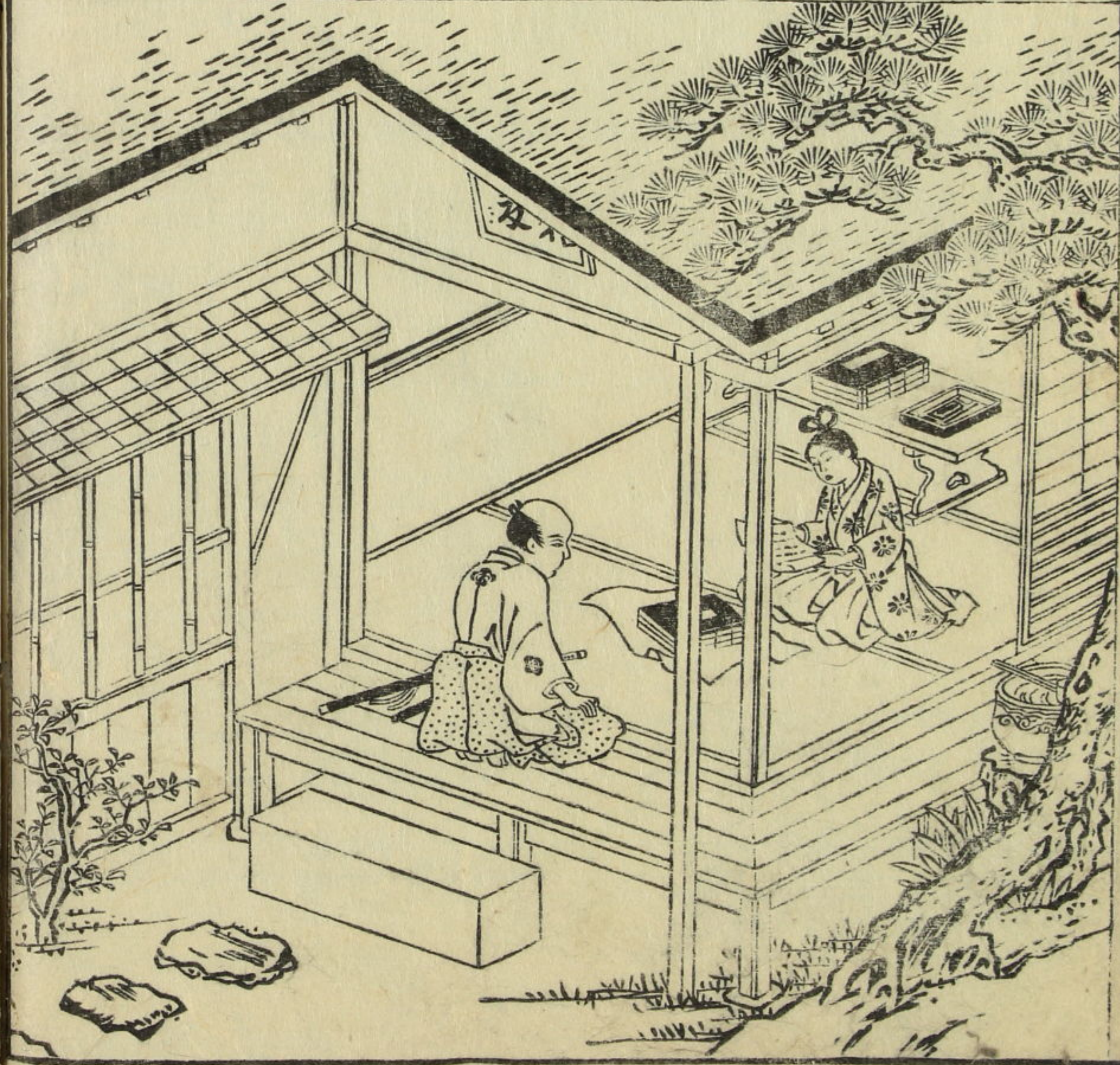
りせりらと何は  
いれ女まめお  
のるりりさし  
いさら成えれお  
あは成をしき  
おを中けり  
おるりりや



あはれおれれ  
なまがかもは  
ゆりのり成  
隆尊のりれりや  
さくゆひく  
あひ人の常らなる  
弟のこときけは洞  
のあのみが  
かくまうくお  
りりりりりり  
ま



見依方飯寺  
 孫金よ武傍坊乃  
 見肺を想ひ事  
 何りて此の傍坊  
 初一が初を染ま  
 九歳一はををれ  
 つつらりやとて  
 いふく詞のむれ  
 姉と兄とつらひ  
 一人の心  
 見付あうりぞ



夕月坊  
 何る人京月坊が誰  
 2ありていふ思下  
 ハあおかなりあ後  
 かなれも余り小能  
 誰解もそわあ  
 名譽一とと  
 何月よ毛れむく  
 三一のころあ  
 下やんふとれ



夕月坊  
 何る人京月坊が誰  
 2ありていふ思下  
 ハあおかなりあ後  
 かなれも余り小能  
 誰解もそわあ  
 名譽一とと  
 何月よ毛れむく  
 三一のころあ  
 下やんふとれ

夕月坊  
 何る人京月坊が誰  
 2ありていふ思下  
 ハあおかなりあ後  
 かなれも余り小能  
 誰解もそわあ  
 名譽一とと  
 何月よ毛れむく  
 三一のころあ  
 下やんふとれ

半者川浪

新二條院乃も若川原やいづ女つりつり申のきほ  
るま守りがねへまゝかゝるまの習志をばいりり  
成た盤井乃相園つゝふひく

あつる月の桂乃枝を思ひ出さかき日やうらん  
やせびりたれば川流流るはむせぬ  
かゝるる洞とねりいふよまの月を神もやせり





菅丞相

菅丞相十一歳乃涉时父の是吾に試了るまじく日鬼  
新詠を依るバ空に夜半に事成斌とべや  
ハ則りこゝろ下弦

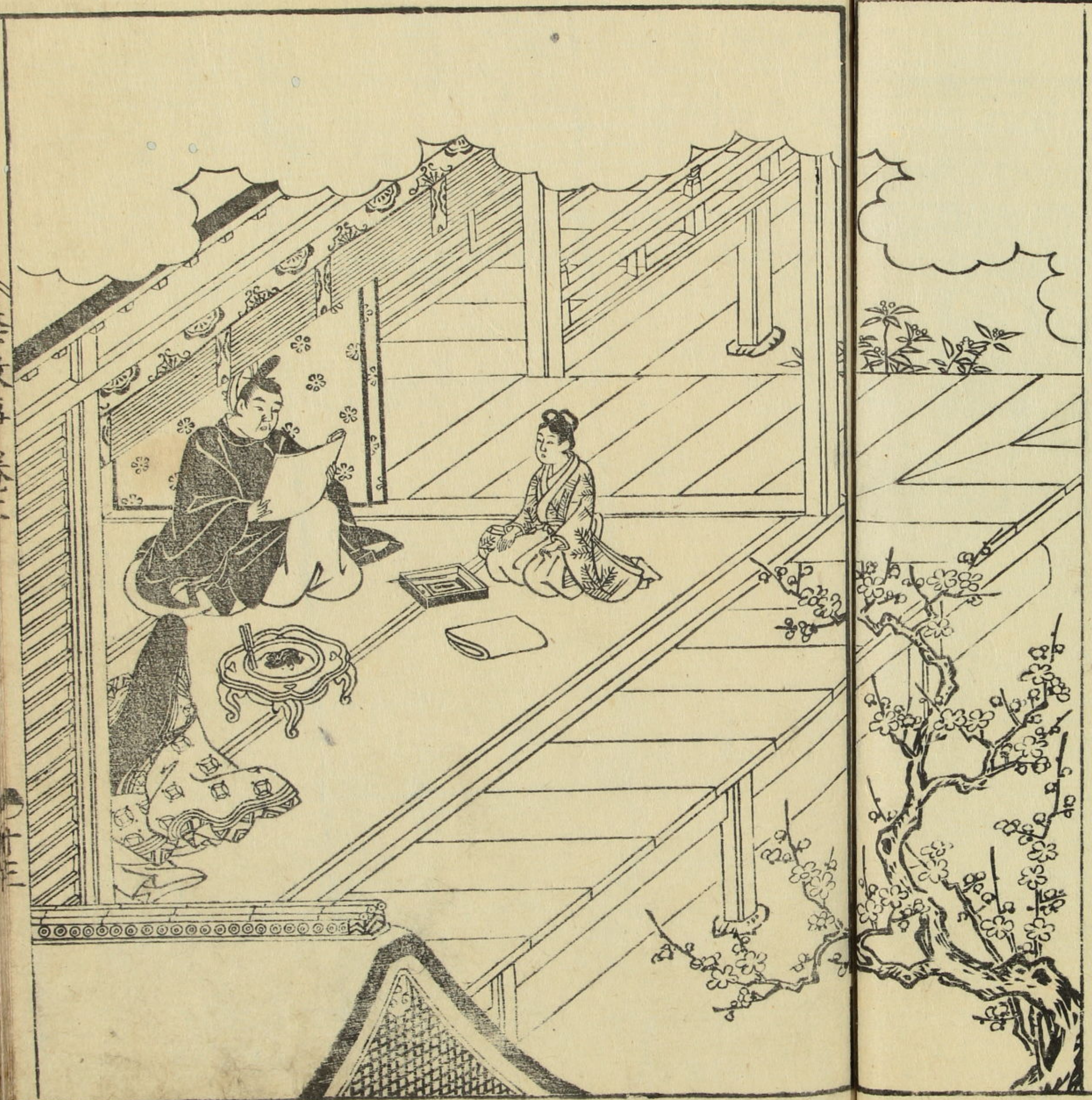
月輝如晴雪

梅花似照日生

可憐金挽轉

庭上玉房聲

父の是を依る石を寄るまじく  
一むひーやあり



長谷雄

中納言 紀佐谷  
 権位よすしの  
 日内あうゆ  
 つく 弟 相迎  
 春之云 題  
 庭増 春色  
 暗砂 緑林  
 変容 暉宿  
 雪紅



菅原相

一 百六十三  
 威トむひ  
 吾権比を  
 ちくく 元白  
 ちくく び生  
 ちくく び生  
 と ちくく び生  
 元ハ元 懐白  
 白赤気 びり



敦光

敦光朝臣江帥乃  
回宅然るころとて

往事物茫共誰

語閑庭唯有不

言花

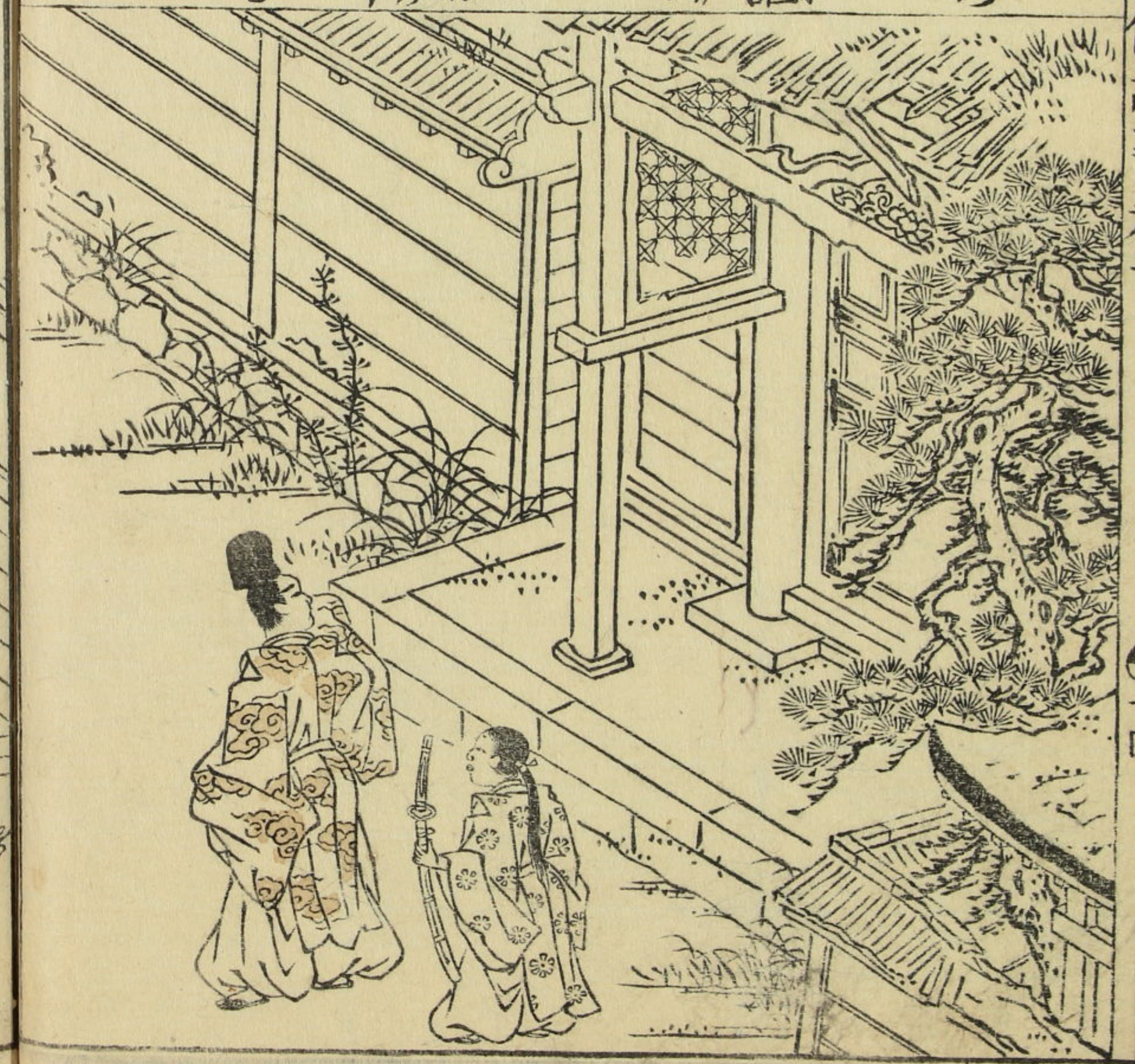
坐仍るるいと多

待かり後並極花十

祈の詩を撰こむ

りふ小詩を述云

の部入むひり



行成

行成朝臣乃成

名成乃名成乃

名成乃名成乃

名成乃名成乃

名成乃名成乃

名成乃名成乃

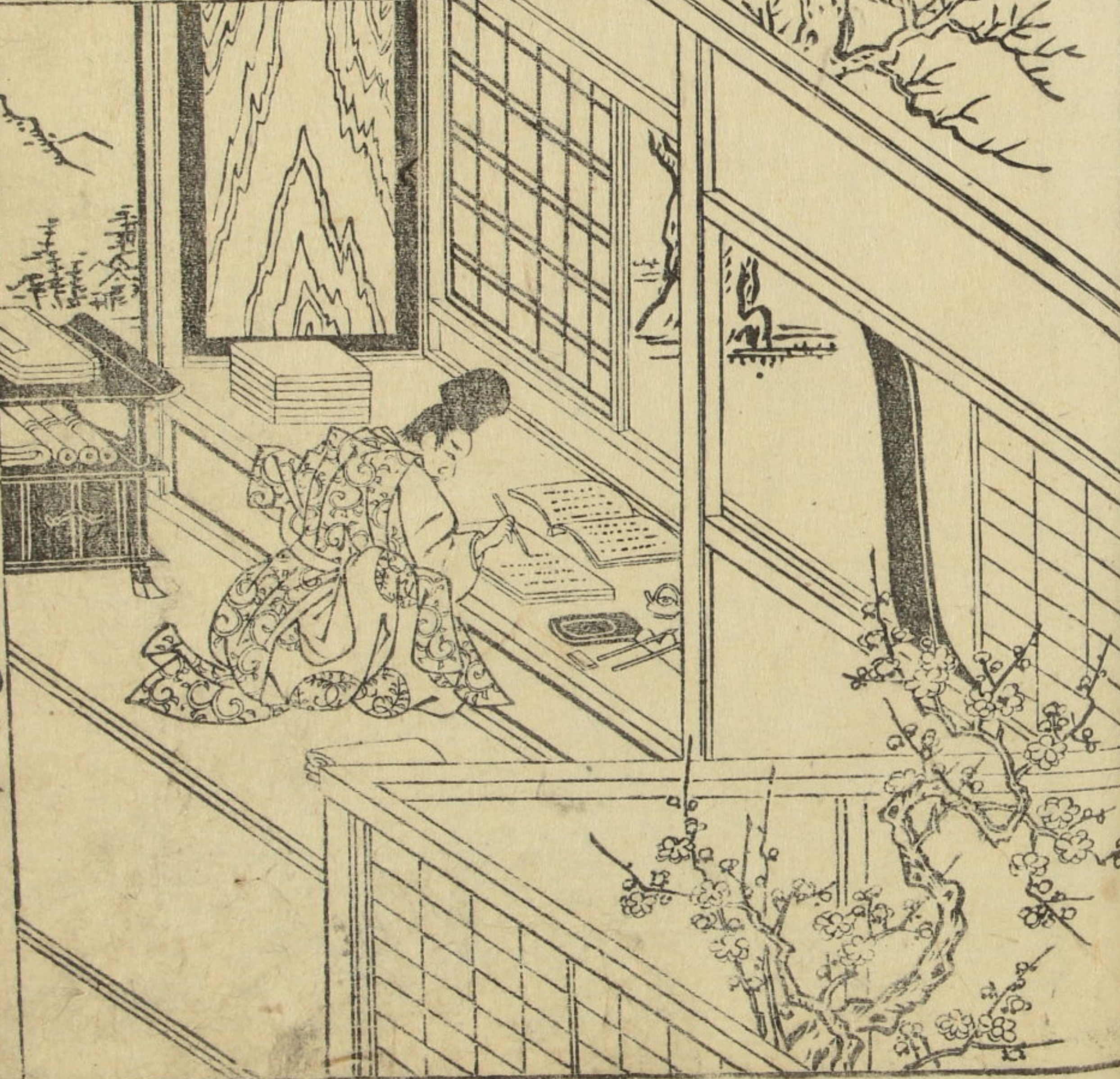
名成乃名成乃

名成乃名成乃

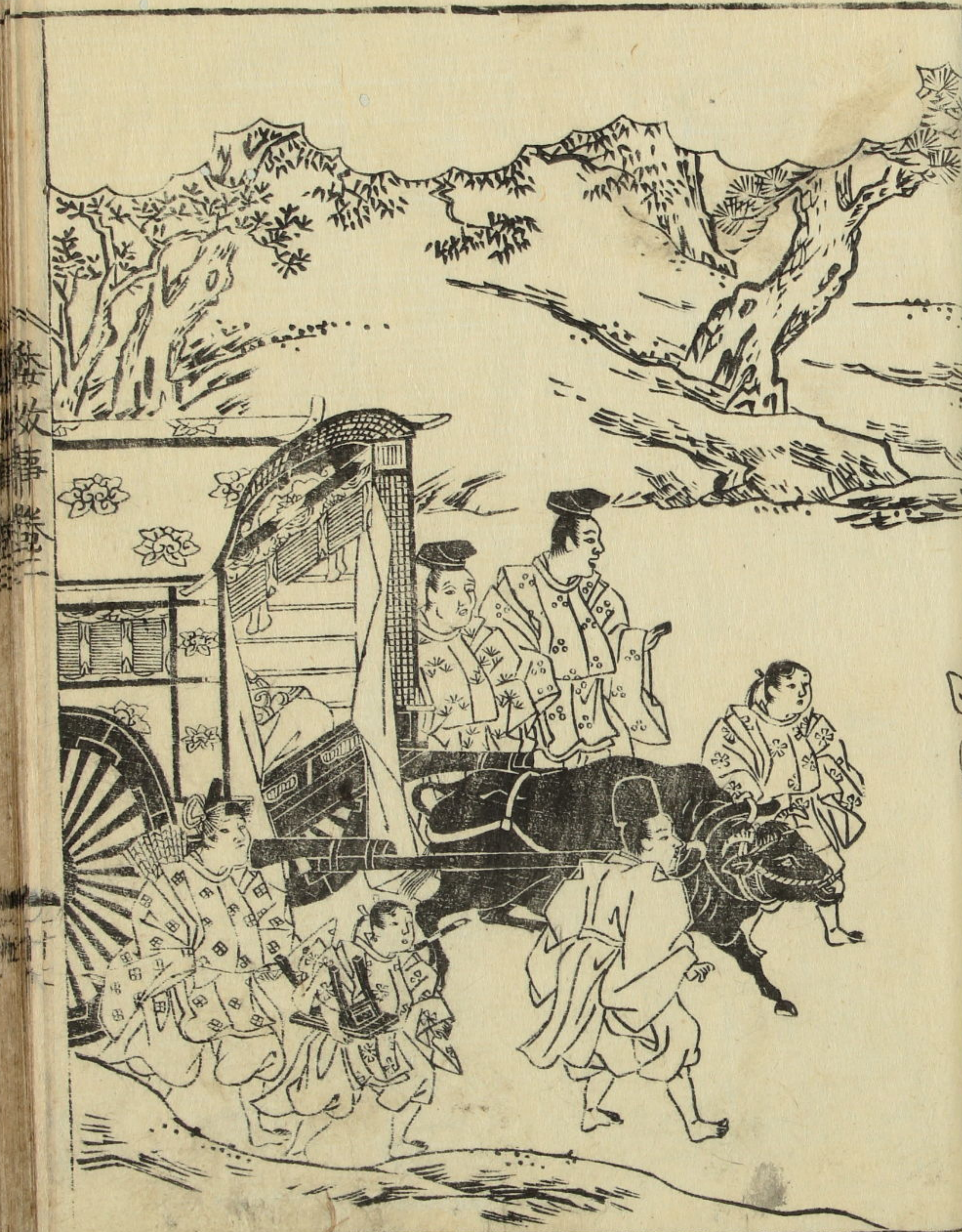
名成乃名成乃

名成乃名成乃

名成乃名成乃





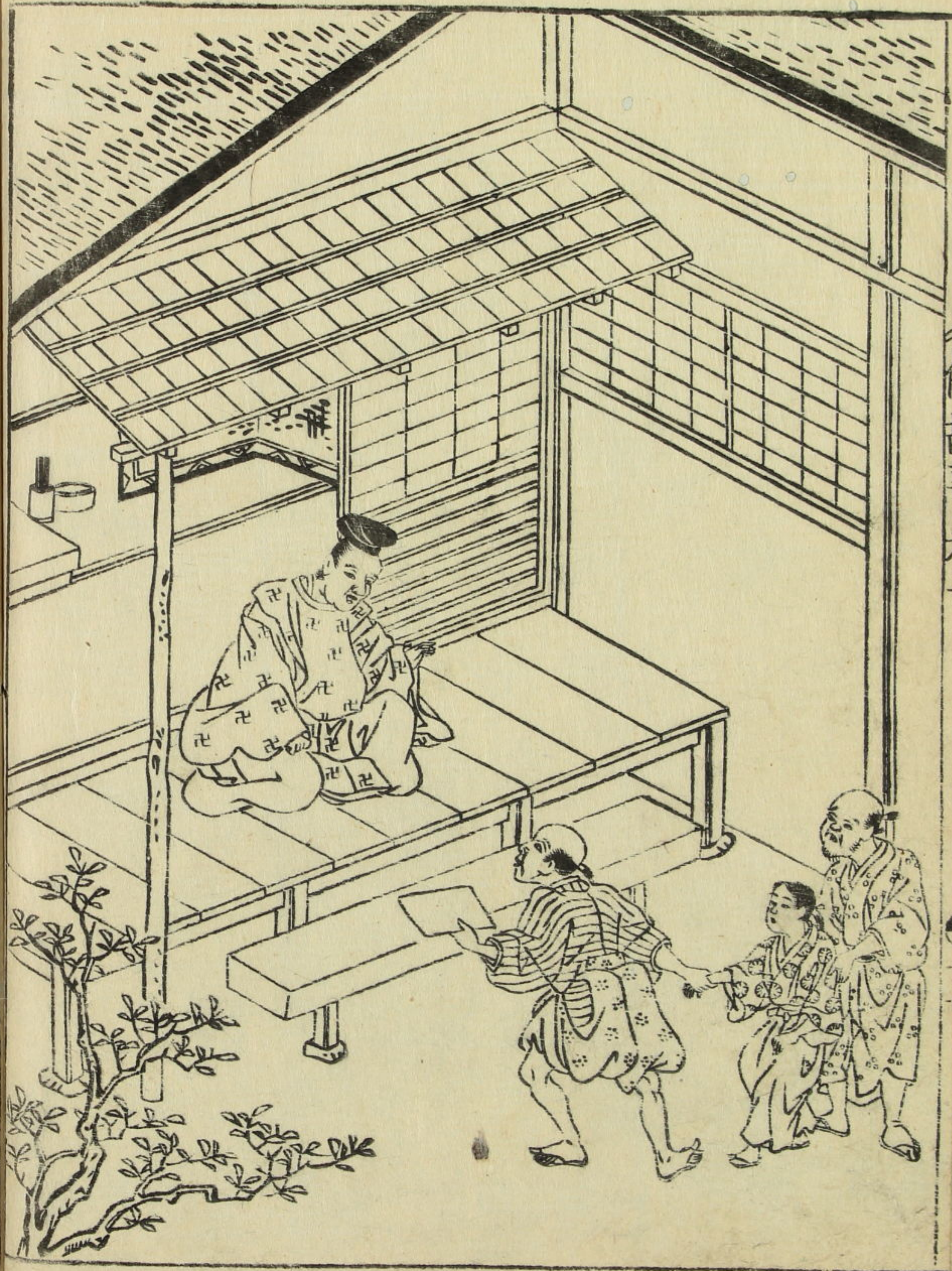


倭古事卷二



倭古事卷二

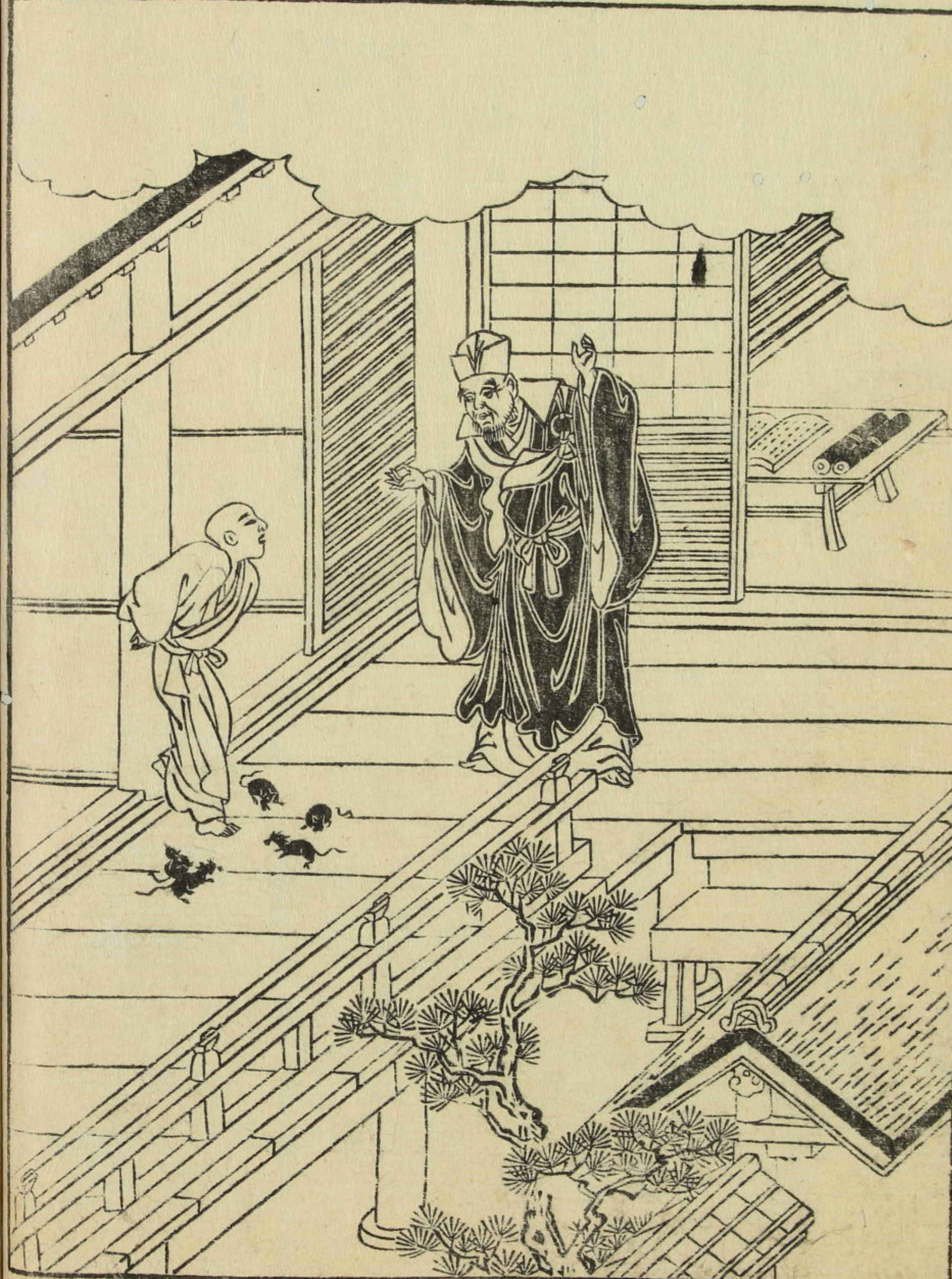
十九



雪舟

僧雪舟伯溪舟也稱之十二三の以發補寺の身  
 子やわりの松とを天姓松を好まそ 物あまを事と  
 せど脚乃坊大まふ怒り寺の松より 納りくいま  
 一じ雪舟乃及んごゆり一物んやまのりう雪舟  
 が松の下は嵐敷多葉り枯りり脚の坊ねどろ  
 き是をふりあふまう 敷り脚あやみく物ん  
 ゆんをまふ雪舟はまくの物了是れ物を以て息  
 がさし一事をむりすし一告るる脚を云ぬる  
 事感感して盡のりやゆるして戒せざりれば  
 物うて下松の乃益物を物りりりりりりり

元信 のぶ  
 古は眼元信乃 こはまなもと  
 弱るし時山 よわまるしときやま  
 川の橋系をた かみのはしをた  
 流れんと句 ながれんとく  
 おる連銭 おるれんせん  
 のが銭花 のがせんばな  
 しんや しんや  
 然中 しかんちゆう  
 予 よ  
 道 みち  
 の の



傳事卷  
 一

をいへるものいふごとくはなれりりやぞ

博雅三位

博雅三位月夜あつりりおとせぬて朱蔭の門前  
て笛吹鳴きしらるよゆゆはあそびしる人の笛を  
りるがをくあつりりあつりりあつりりあつりりあつりり  
よ新あそびくあつりりあつりりあつりりあつりりあつりり  
あつりりあつりりあつりりあつりりあつりりあつりりあつりり  
えりりあつりりあつりりあつりりあつりりあつりりあつりり





ハ永く世と  
止りりほふま  
けバ鬼乃笛  
かあしとぞ  
世う茶二と  
つら名笛ハ  
ひるのうと

中納言なる  
て世と遊遊  
く初めは掛  
海房  
中納言なる  
て世と遊遊  
く初めは掛

撒しむら  
吉舟とるる  
やせ物の事  
成拓きて書  
をち細く実



世乃許まらせのふ事本とさげて実世の許まら  
掃さんむらばそののふあり  
君が位名の何より成来まれば世のいぬらに  
心氣はつへらるはななる心ハ正忠の人ありと  
や玉後玉ひらりか治平年を下げに調あらがる  
けさそびゆる遊世むひたり

傳古事卷之三

繪本咏比事卷之三

目錄

寶皇女

基久女

弓弦月

松山鏡

留來加之梅

宗貞

石見才女

嘉智子

靜女

宗橋

經信達化生

八重櫻

伊登内親王

楠正行母

傳古事卷之三

平貞俊書

茶田勝家書

大和義婦

山名氏清書

吟雨婦

柏手公成

強本和比率卷之三

葵皇女

葵皇女六節吟  
 皇太后早しれば万民がげき苦  
 じ事かぎり吟  
 げゆ人  
 種我大元孫曲成守くあり  
 轉讀せ  
 免事  
 心た  
 又よ強なり  
 是小らく  
 皇太后  
 歌を  
 出ひ  
 曲の  
 河と  
 小幸  
 一む  
 口方  
 成相  
 夫を  
 仰ひ  
 ぐ  
 あり  
 皇太后  
 出ひ  
 雷  
 鳴る  
 大よ  
 雨  
 ふり  
 あり  
 乃び  
 び  
 れ  
 ば  
 暑く  
 毛下  
 越  
 深  
 衣  
 着  
 民  
 恨  
 び  
 の  
 眉  
 張  
 開  
 き  
 菊  
 花  
 を  
 唱  
 へ  
 玉  
 體  
 と  
 皇  
 女  
 が  
 着  
 み  
 な  
 り  
 等  
 なる





新女

右を新女に爲るが如く  
 新女を引く孫曲成は  
 めりゆゑよふとん  
 孫もれども然し  
 止事とほす  
 く白雪の袖をとりかへ  
 黄竹の衣をうへ  
 一は心算の  
 一は心算の



孫曲成の  
 孫曲成の  
 孫曲成の  
 孫曲成の  
 孫曲成の



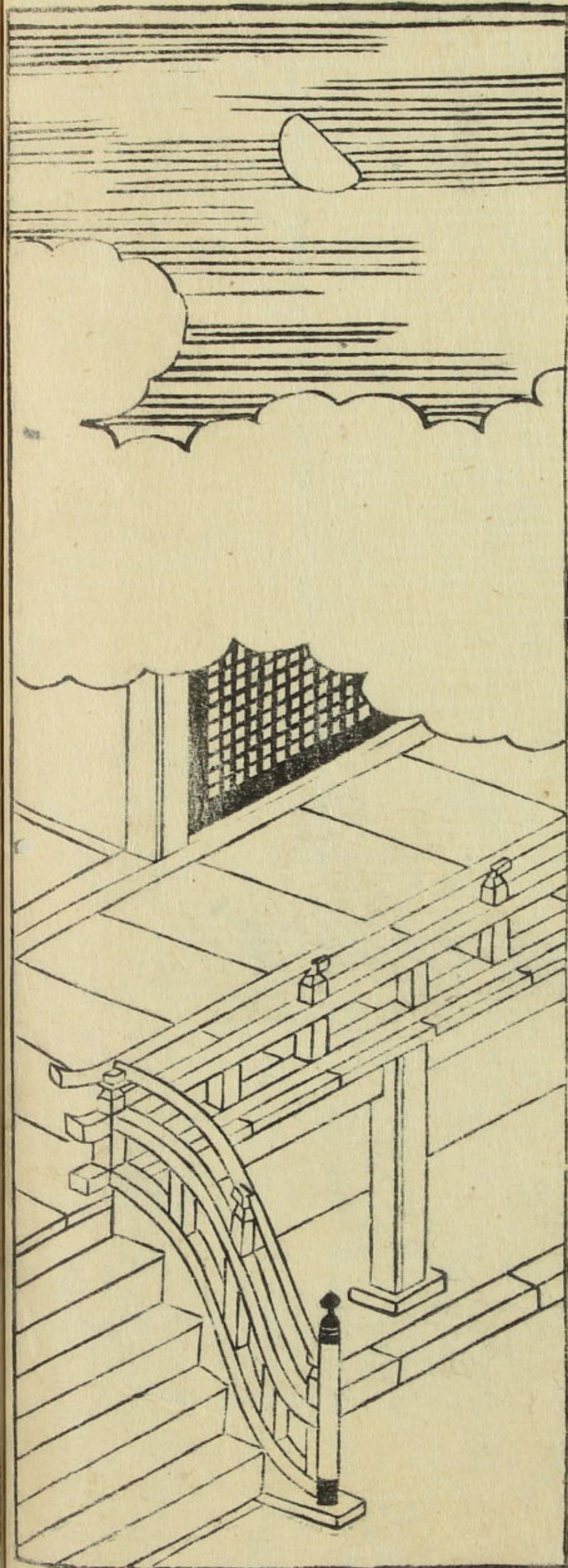
孫曲成の  
 孫曲成の  
 孫曲成の  
 孫曲成の  
 孫曲成の

御成道巻三

五

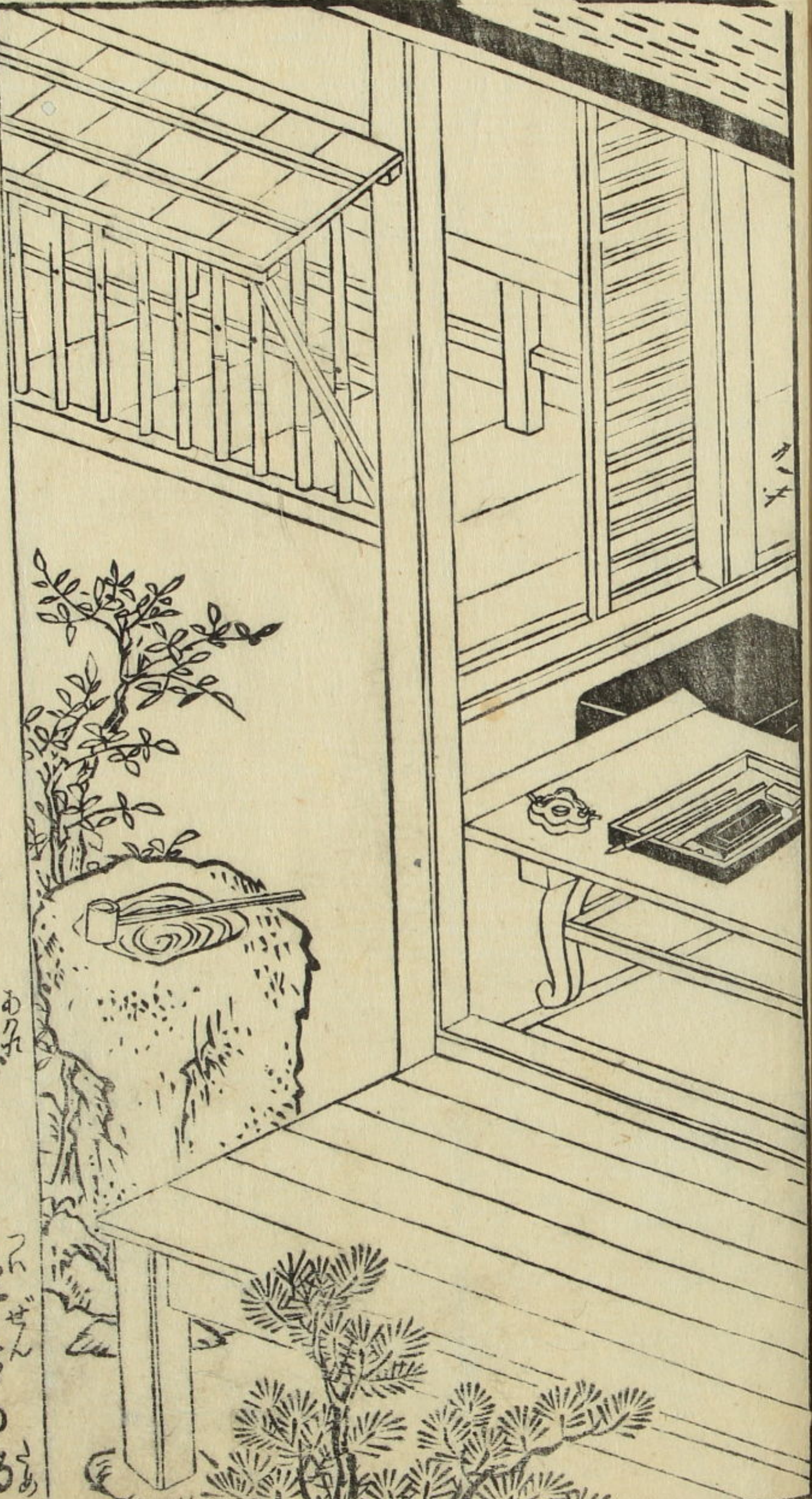
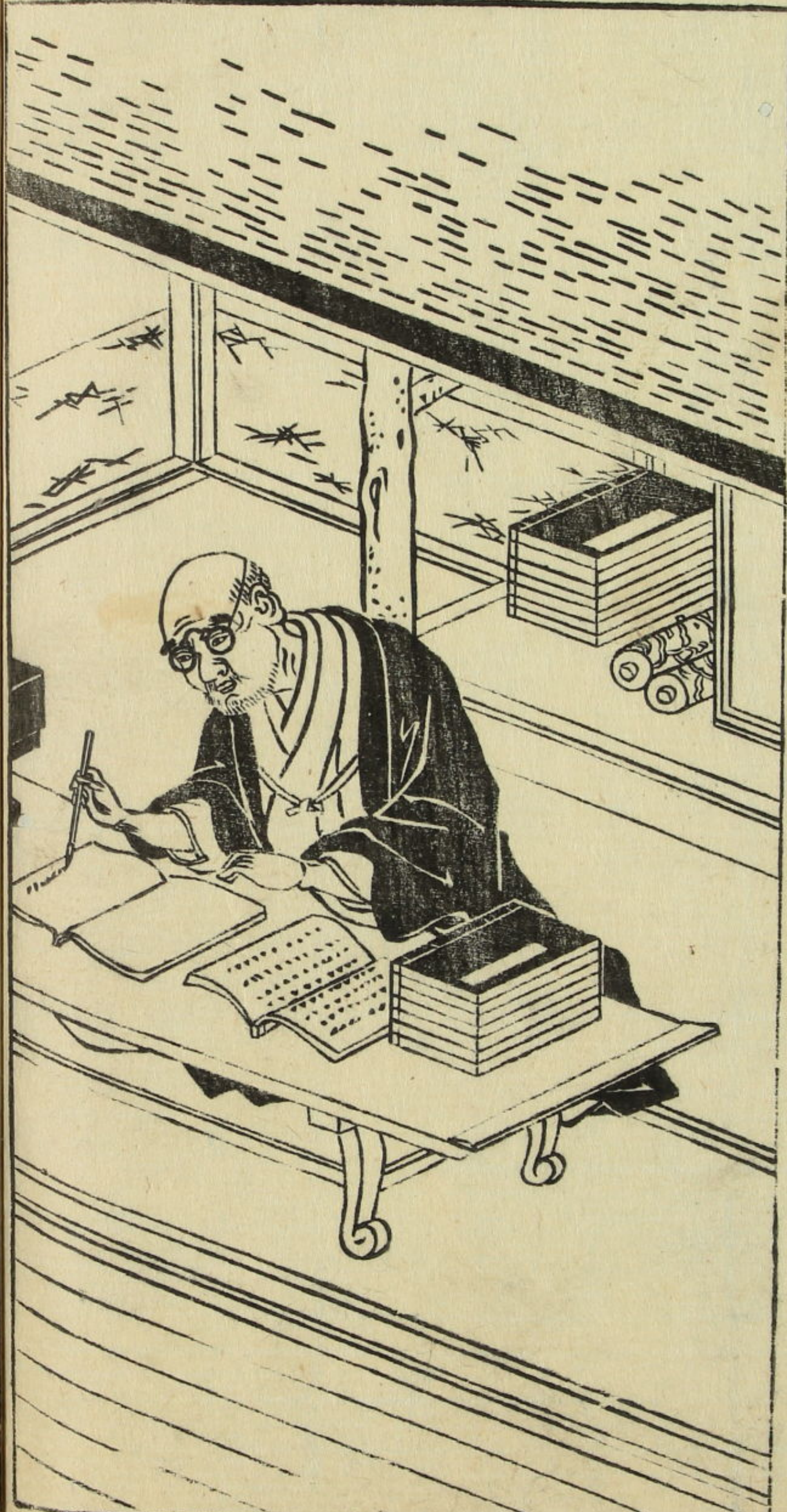
弓張月

亭子院の時時恒を石きて月を弓張とよみハ  
 のんがこちのけつしゆつれとわゆる何りなれば  
 照月を弓けりともよるハ心ばさうてつれどなり  
 山門ふくやでせぬひ深なる路りりりりん



宗棧

其<sup>せん</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup> 泉<sup>せん</sup>列<sup>り</sup>場<sup>ば</sup>は 宗<sup>そう</sup>棧<sup>けん</sup>や<sup>う</sup>て 法<sup>ほふ</sup>書<sup>しよ</sup>何<sup>なに</sup>り 源<sup>げん</sup>氏<sup>し</sup>物<sup>もの</sup>後<sup>ご</sup>法<sup>ほふ</sup>は<sup>は</sup>と<sup>と</sup>す  
即<sup>すなは</sup>ち 郊<sup>きやう</sup>の<sup>の</sup>は<sup>は</sup>む<sup>む</sup>り 樞<sup>しゆ</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>て 予<sup>よ</sup>も 法<sup>ほふ</sup>持<sup>もち</sup>た<sup>た</sup>る<sup>る</sup>が<sup>が</sup>う<sup>う</sup>宗<sup>そう</sup>棧<sup>けん</sup>一<sup>いつ</sup>を<sup>を</sup>

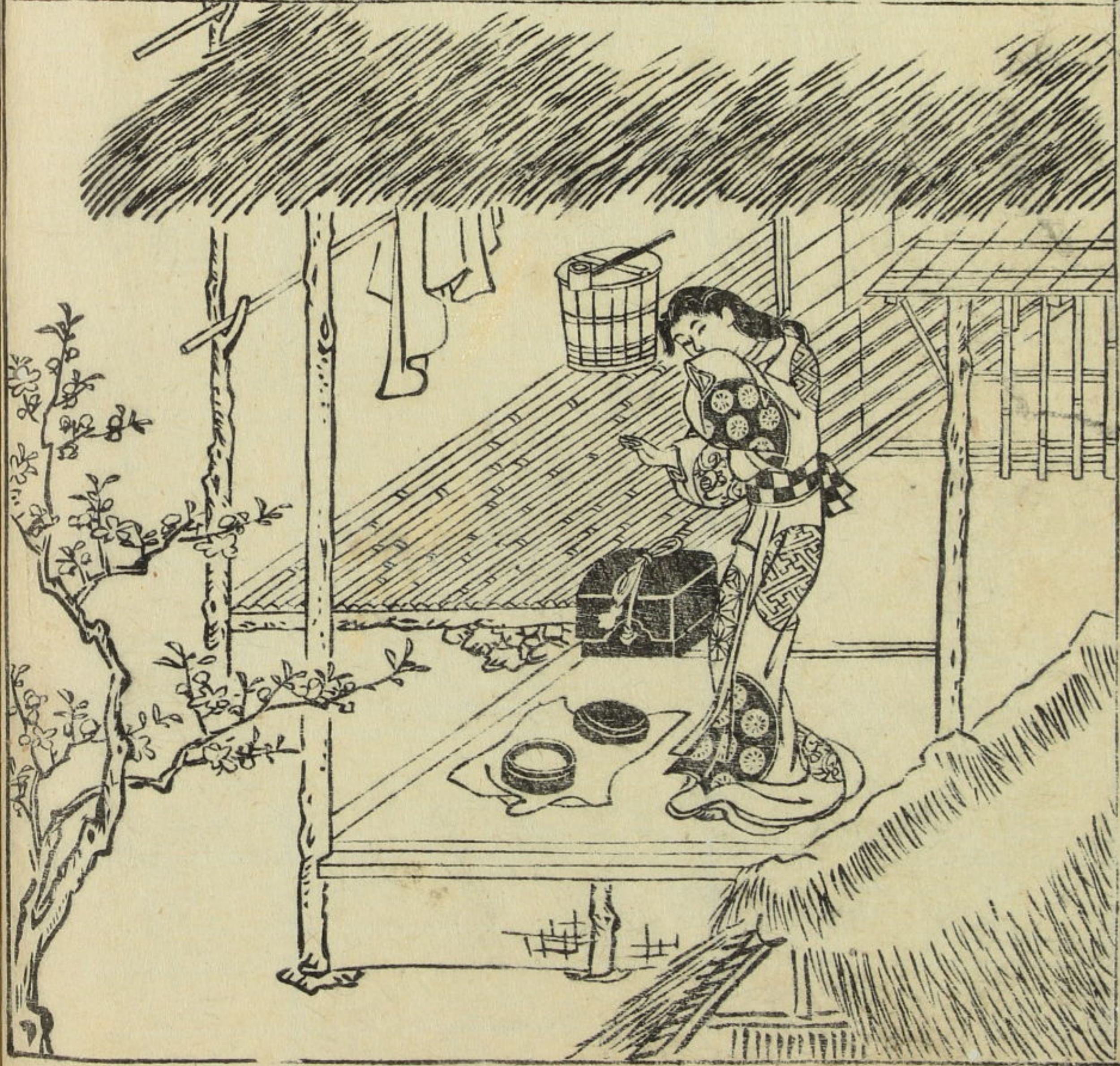


か<sup>か</sup>の<sup>の</sup>杉<sup>しん</sup>木<sup>ぼく</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>人<sup>にん</sup>か<sup>か</sup>れ<sup>れ</sup>が<sup>が</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>は</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>法<sup>ほふ</sup>憐<sup>れん</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>遊<sup>ゆう</sup>言<sup>げん</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>も<sup>も</sup>い<sup>い</sup>し<sup>し</sup>よ<sup>よ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>  
予<sup>よ</sup>も<sup>も</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>か<sup>か</sup>う<sup>う</sup>一<sup>いつ</sup>葉<sup>えつ</sup>の<sup>の</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>し<sup>し</sup>り<sup>り</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>



松山鏡

松山鏡の物語は  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を



お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を

神位逢化生

神位逢化生  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を

お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を

お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を

北斗星前横旅雁

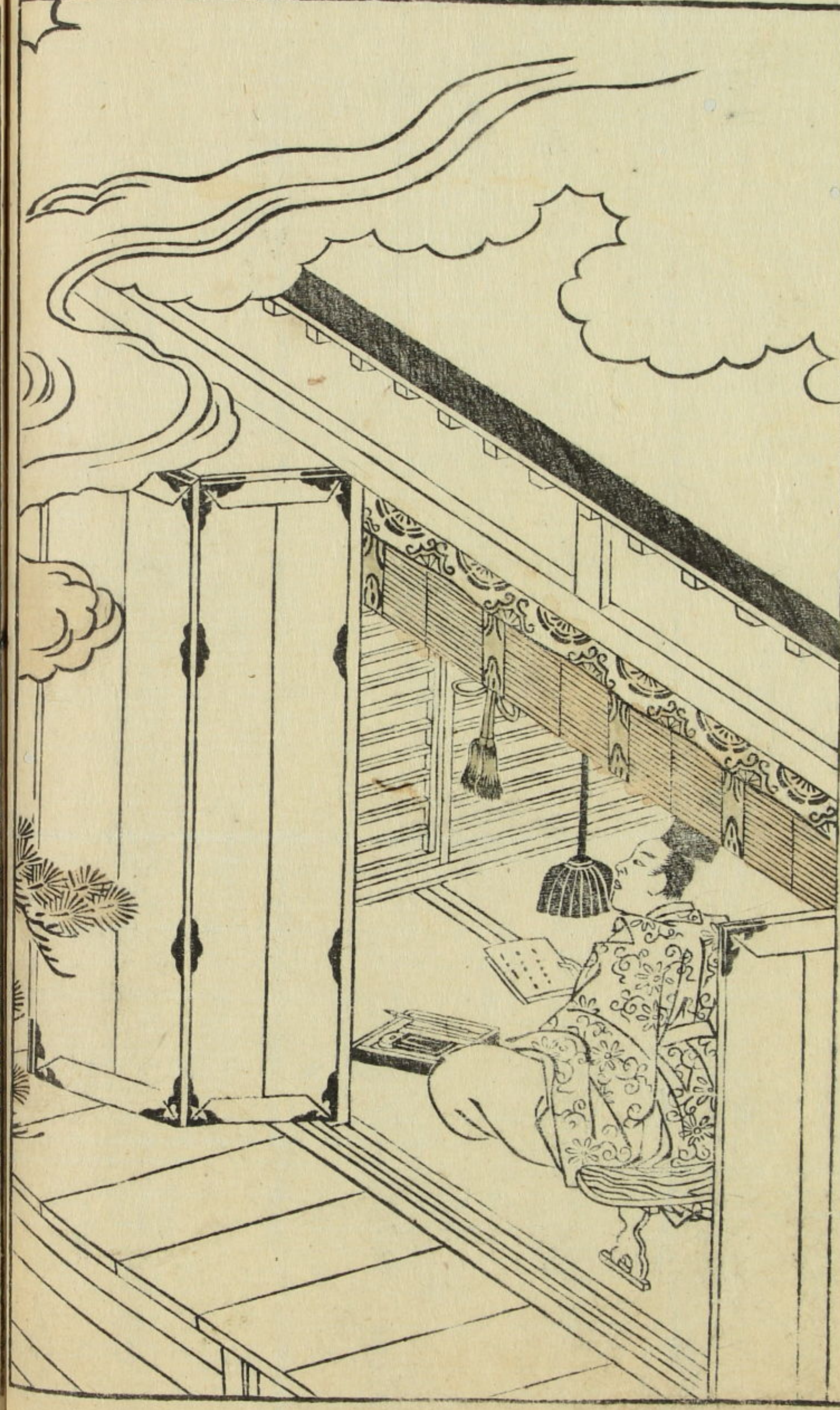
南樓月下持寒衣

南樓月下持寒衣  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を  
お八は鏡を



倭女傳卷三

九



せうりやがいのほやーかりき  
 びりびりくんやうーハ揚大善後を念びーむひりれバ忽ちう  
ヤガ  
しんがう  
くらんがさう  
ねん  
むひりれバ忽ちう

倭女傳卷三

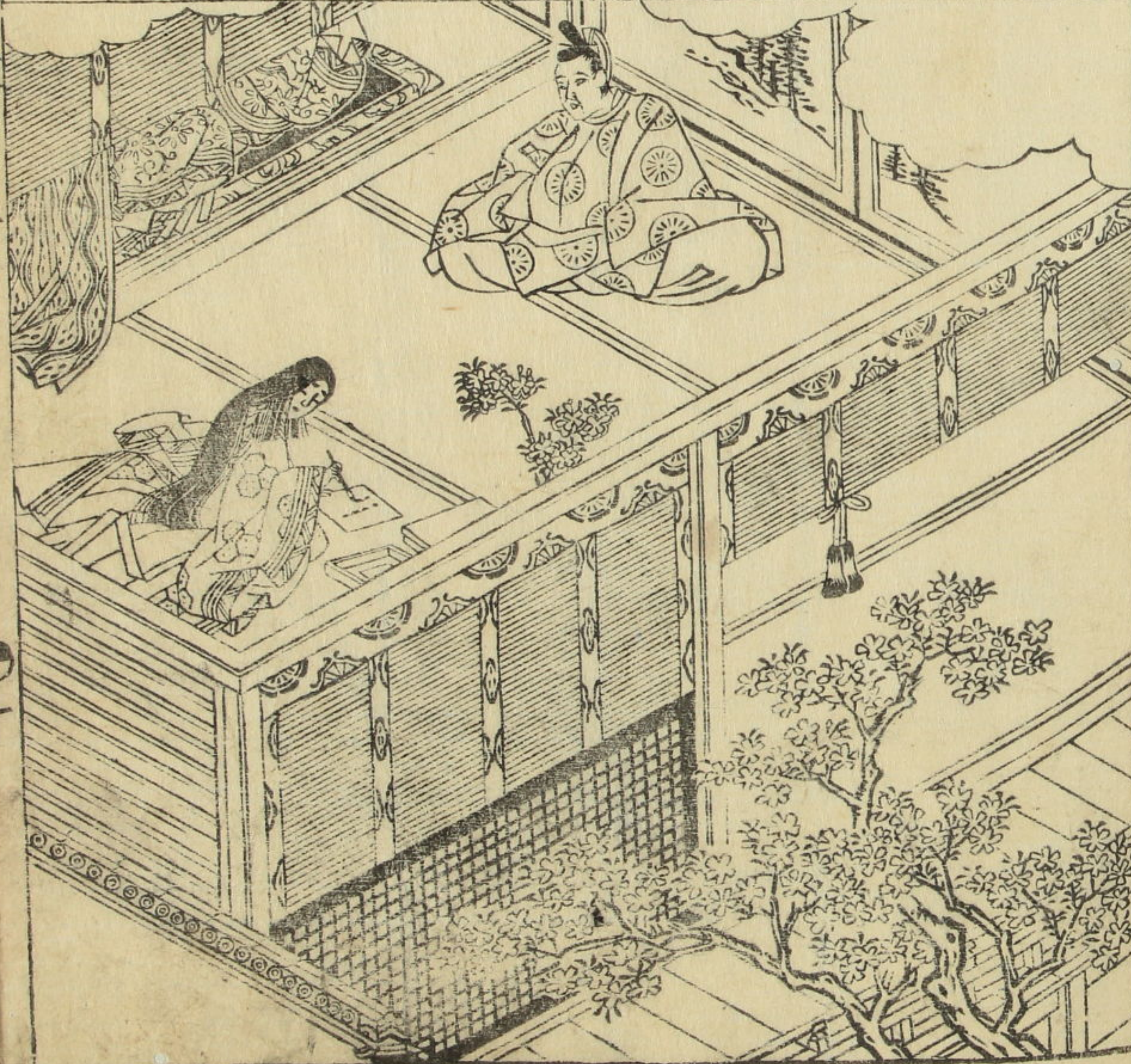
九

体古車

留来加之梅 まめこけうしのびめ  
 上か茂れ境の下ろ うか茂れ境のたろ  
 物念もといふ守あり ものねもといふまもりあり  
 物りけちふ志げし ものりけちふしげし  
 何れを庭前よ梅の樹 なにをにわまへようめのき  
 何り気張を敷く なにりきぢを敷く  
 あり紙よむ ありしよむ  
 こそふり梅さうり こそふりうめさうり  
 けやいさうと記を けやいさうと記を  
 三記ふこそよれ さんきふこそよれ  
 まよひしてこそより まよひしてこそより  
 け梅くひひあり けうめくひひあり



八重梅 やえさくら  
 上東の院中へ うへとうのいんちゆうへ  
 ねりしる時 ねりしるとき  
 猶ほ なほ  
 輔親がむ すけのちか  
 あり あり  
 ねり ねり  
 人 ひと  
 何 なに  
 が が  
 人 ひと

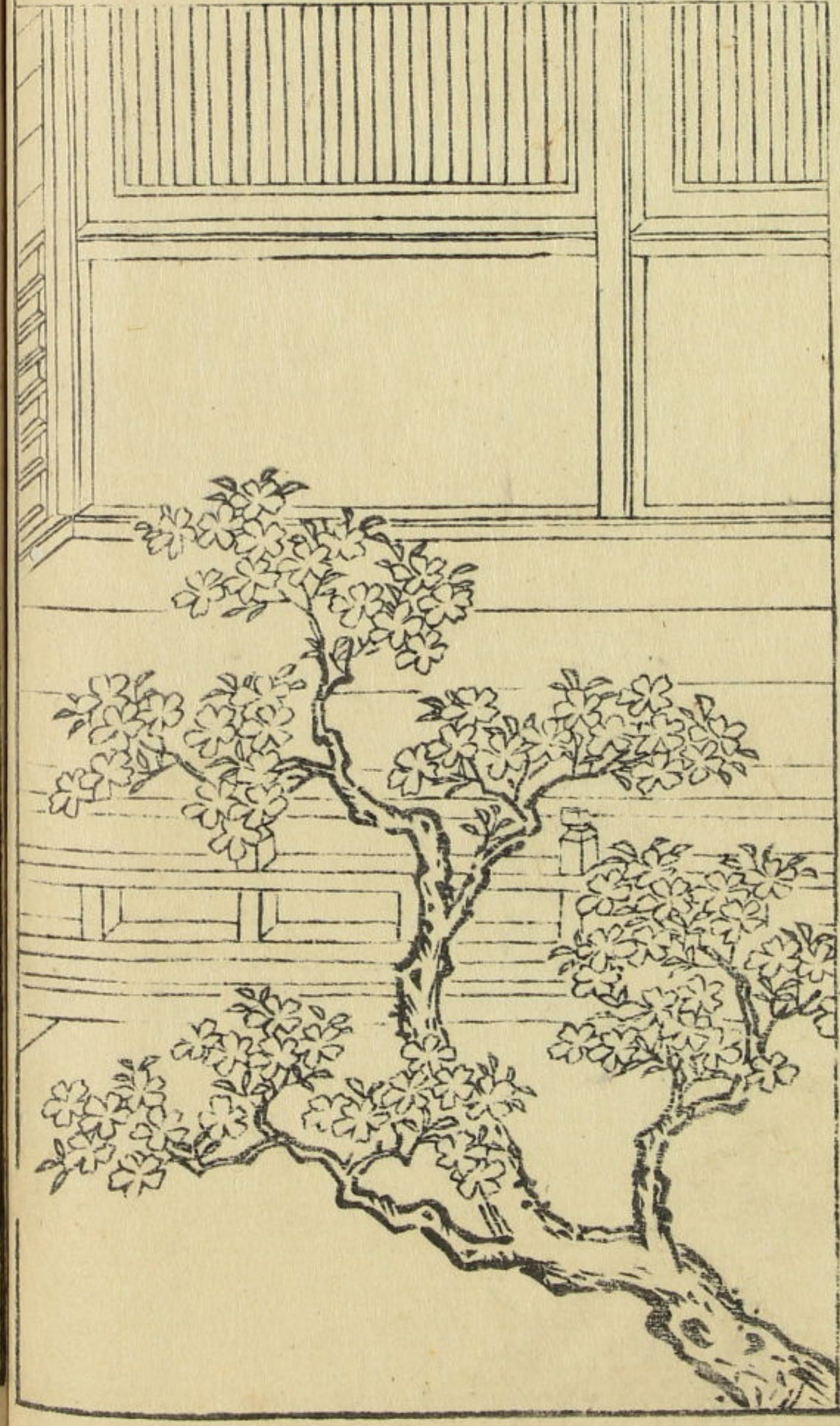




伴登肉親王

肉親王ハ其系業年其母公ナリ。其母トシテ其母ヨリシ  
 申シ業年ハ帝國ノ所ニシテ。其母トシテ其母ヨリシ  
 其母トシテ其母ヨリシ。其母トシテ其母ヨリシ  
 其母トシテ其母ヨリシ。其母トシテ其母ヨリシ  
 其母トシテ其母ヨリシ。其母トシテ其母ヨリシ

此の許に  
 平らなるあび  
 なる人ばあ  
 老ぬれば  
 ころの  
 ありといへば



いよ  
 かり年いと  
 おがくしては  
 世中ふさめ  
 人のよめあ



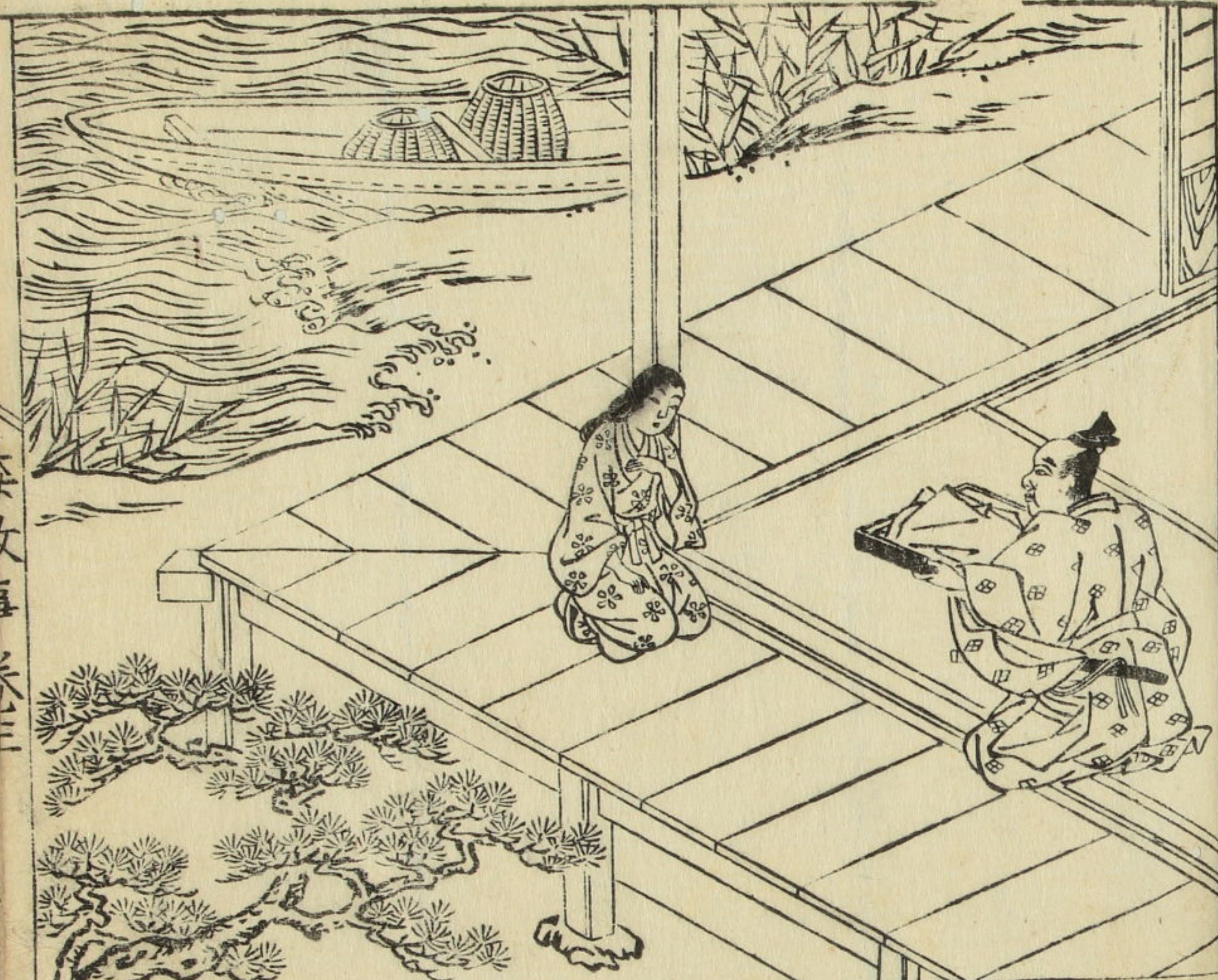
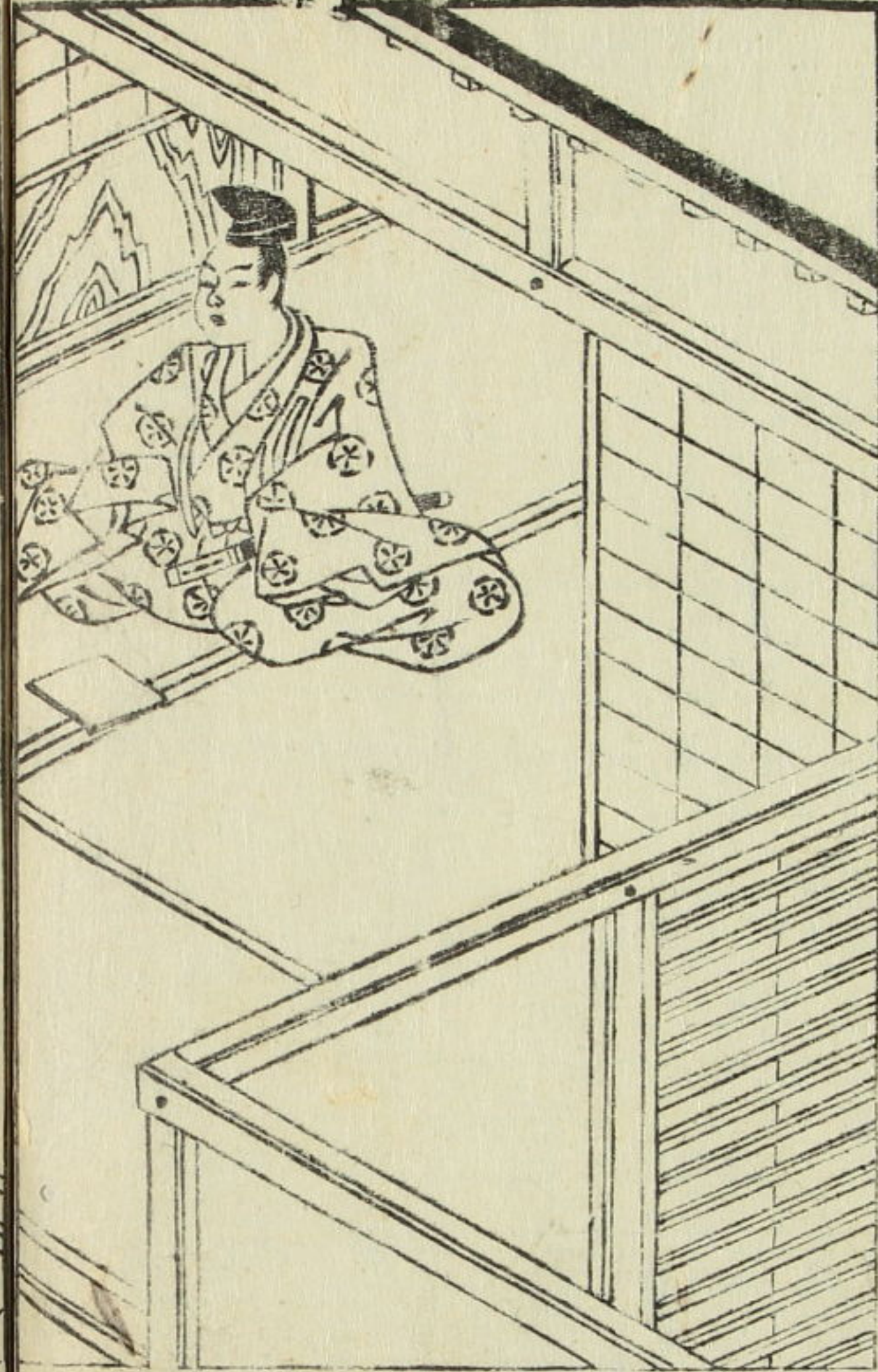
伴登肉親王

三

石見守海

石見守海

石見守海の娘が女ひとり一守石見守海より由よ玉  
とつやりの加いぐ和歌を詠むくまのつこ  
二八分なりむきおれは目こい  
おなりのまじりて  
おなりのまじりて  
おなりのまじりて



おなりのまじりて  
おなりのまじりて  
おなりのまじりて  
おなりのまじりて  
おなりのまじりて

おなりのまじりて  
おなりのまじりて  
おなりのまじりて  
おなりのまじりて  
おなりのまじりて

正行母

楠正行は母ハ猶正之位正成の猶人なり正成湊川にて討  
 死有らば是利孝氏にまゝ成成はなれはふ書子ふれまみ  
 て照之猶成焦されり。時小正行十二才なり母の歎きの切らり  
 然るみ極く打仏考れ方小行母云あや一こん所よ正行の神  
 を授ぐり言せん母れどもきいさ若ていらく梅橙ハ二葉よ  
 日香一とつり汝實よ正成の子らるべ何ぞかくを授けらるる  
 や右利友を床よ慈を給ふの日世を橋井よりゆゑある  
 自害志とらるらんや汝老の志一何くば父の仇を復し悉

成帝位に即位せらるる或いはめ且ありて刀成奪られり  
 正行是よりして父の遺命母れお訓行小治にれは孫  
 吳の寺正神の良策をゆく名をて下よかやじ懇切父小  
 者らよりり是倫母れ賢らるるがいつはあや

平貞信書

貞信死刑よれよの日武信を頼て常小秘蔵せし刀一討  
 此文を想よれら書あたまにかりて極く和あ一そ公念い  
 してまおるおの力よけ物をさして死より貞信よりれあ  
 みる人の世も何の時ハ救はるるまふハもれぬうま力より



徳川家

五



徳川家

六



妻は  
うら  
これみよと  
嫁くわらぶさいのちなるぬり

山名氏清妻  
氏清謀叛  
軍討まき討  
死しらぬ  
えられば  
ぬくか  
子しむねを  
して



小舟投り  
人く阿や  
か一そを流り

おのぞハ  
はるま  
まづひも

柴田勝家妻

柴田修理亮  
努力矢  
一族討  
あはれ

乞乃酒高あななり 又兼中よ入く内室ふりこれけ  
酒を酒高ハ西一を佐書れ妹かれバ猿面郎がふたまた  
くぞまなく城越出くのぐれむ人とわりられバ内室渡



をりててそめを  
や死をひるふせん  
あがあやわとあま  
つふんせきりり子  
規の書修られバ書女  
やりゆへど  
さうざんらわらね

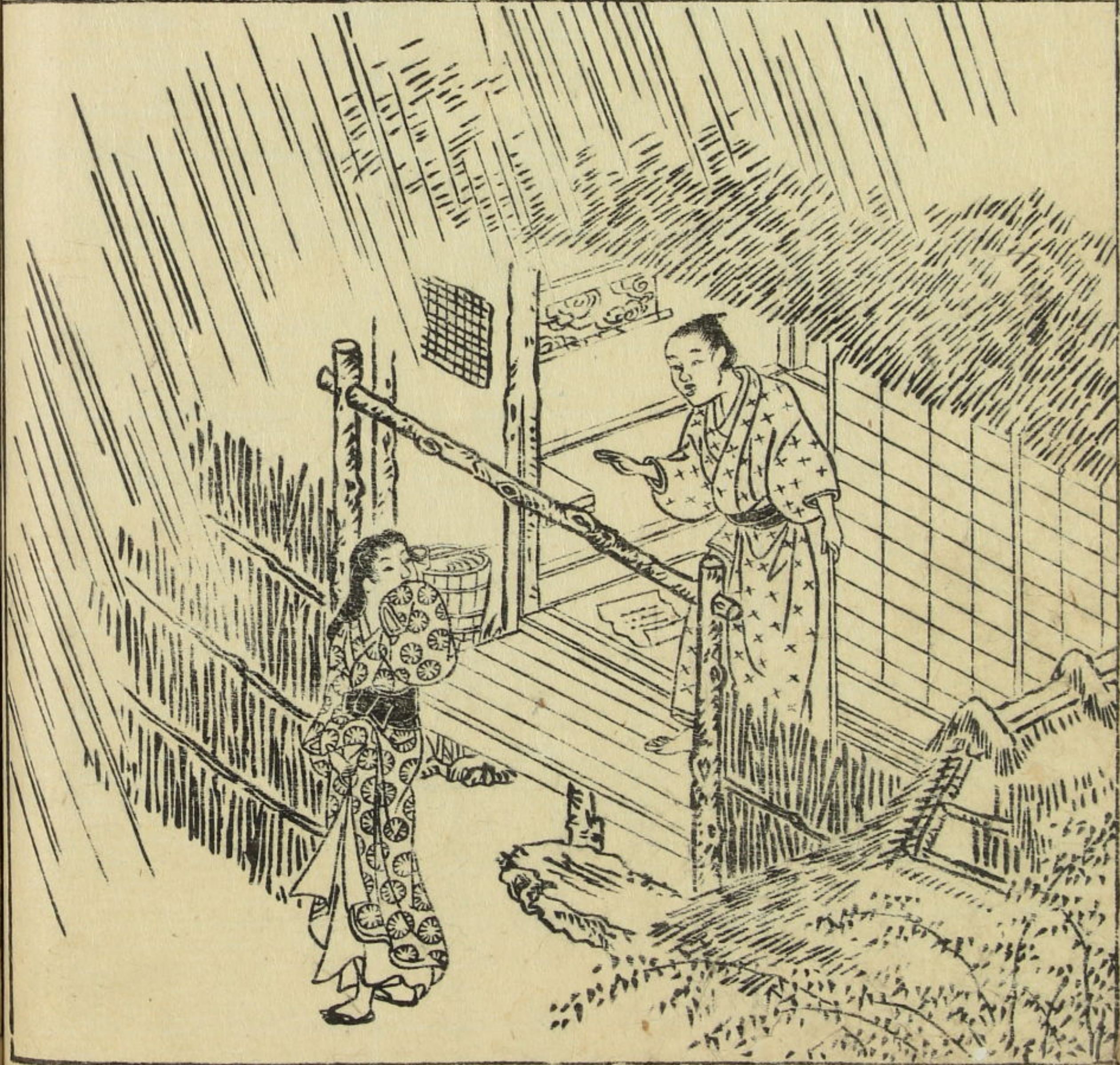


又高新やふ若を好よわて何ド々和歌歌謡ぞ  
ねもあからけはさしをけ乃の志らや死出の心

と返れ規の書修  
越ささふかまきり  
勝家也  
り川よの多治らうり  
さたの名をそ井小  
何げよ  
ゆわらうぞぞ

雨婦

あつたきんぎらふ  
るはひのれぬ  
はまよすそくきそ  
次は歌紙出んや  
すらよ像よ風ぬ  
まのりやうきつ  
く風やこるら  
を待つとさるべ  
やけ女まをうり  
てよ紙もむ



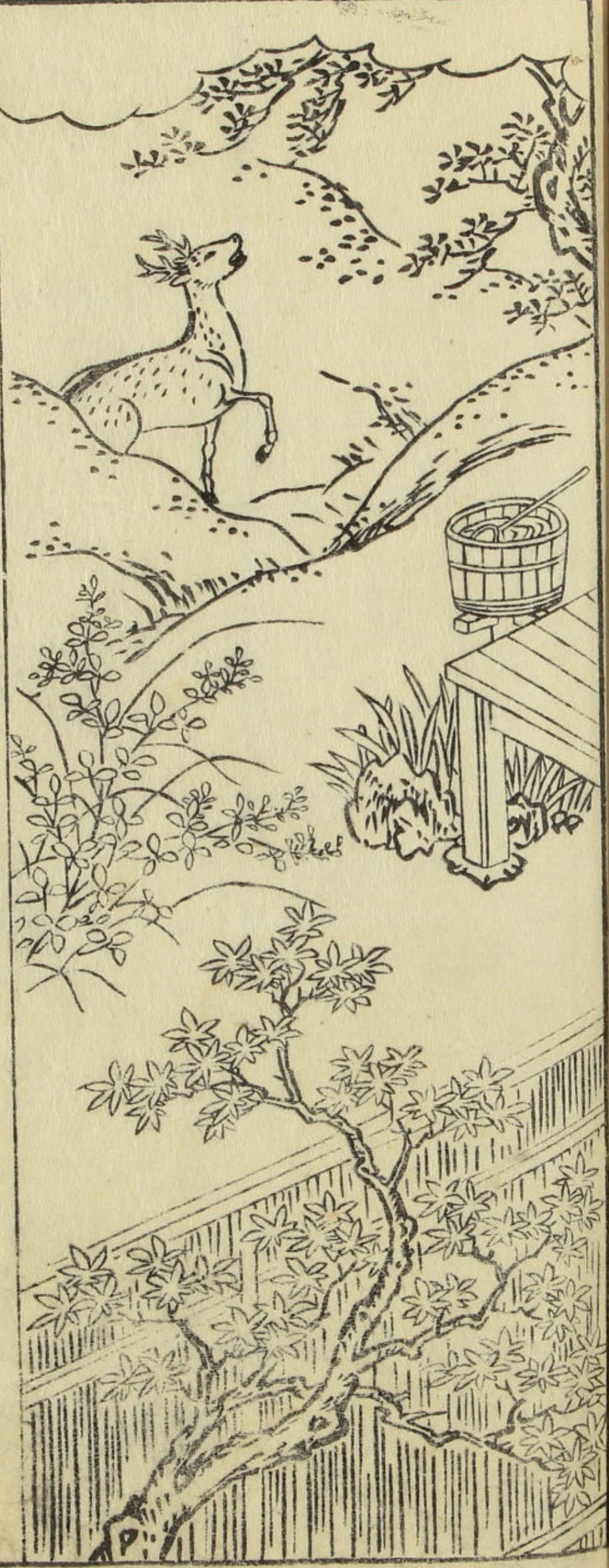
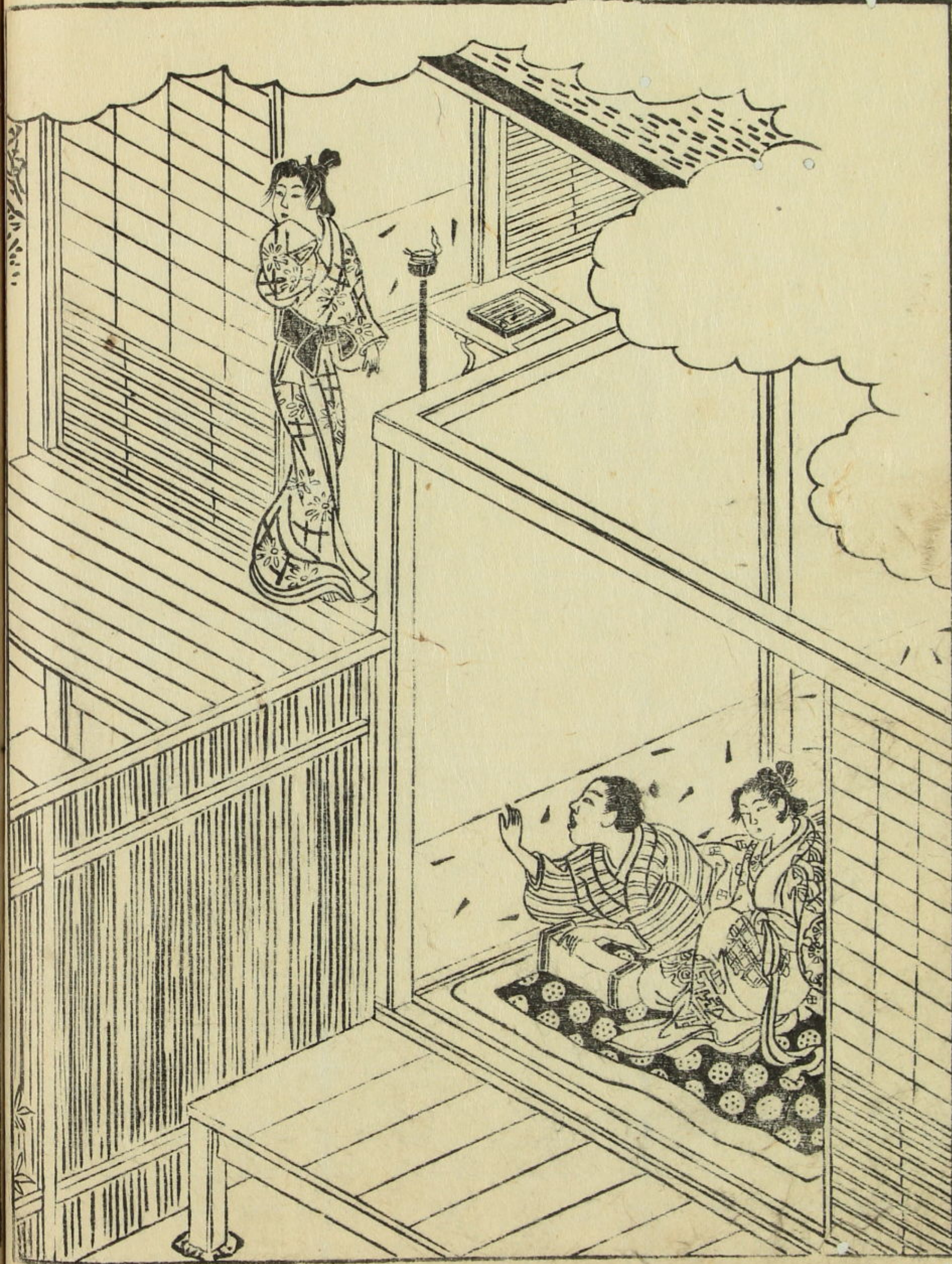
あつたきんぎらふ  
まけありをすたまたまに感ト氣かりて  
やめまぬおやりぎむつゆぐ  
とふりりやななり

大和義婦

義婦はまよ仕へく  
かみひゆり  
毎夜あぐ  
義婦ハねここ乃  
大和義婦

大和義婦

大和義婦

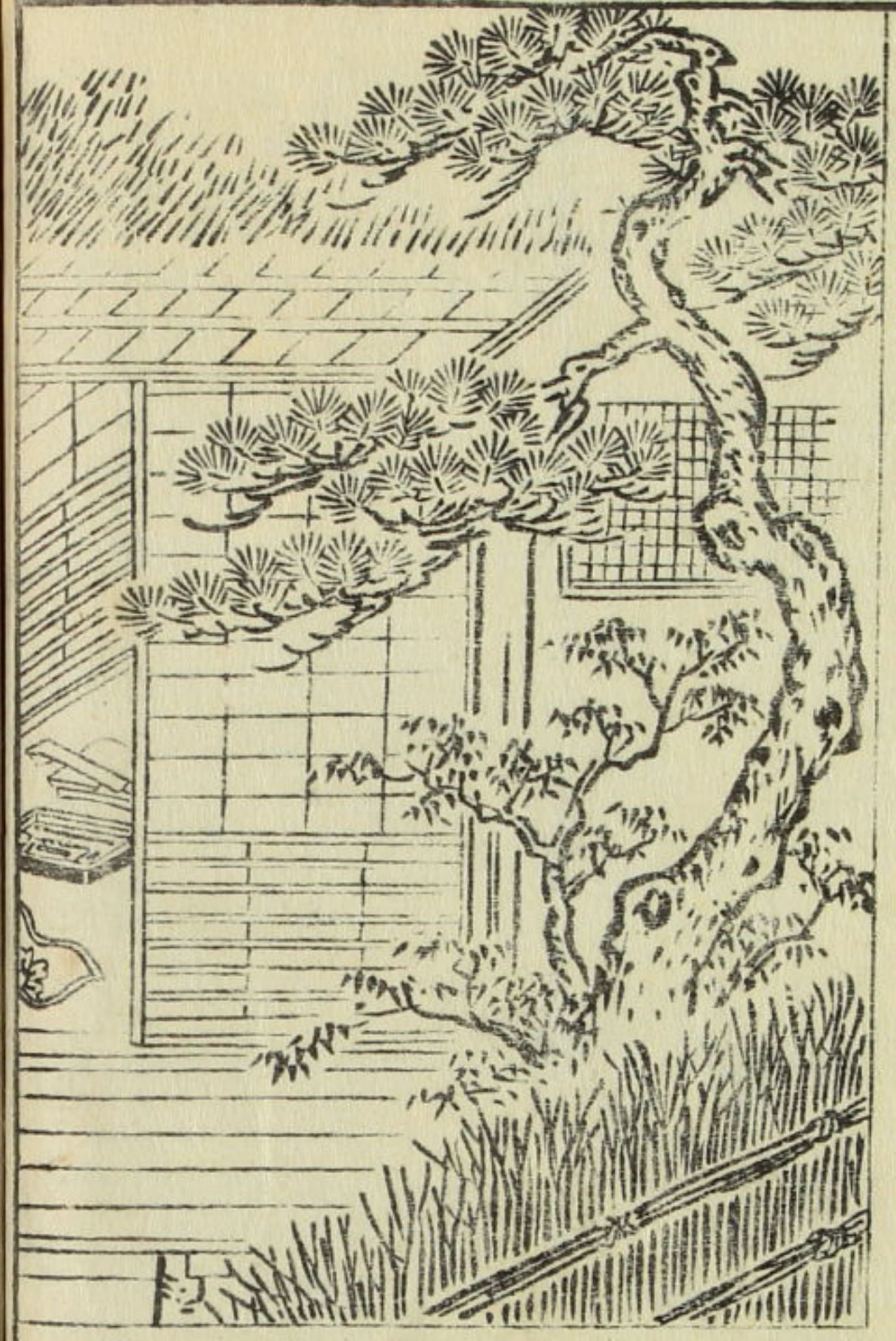


此れはまほを陽射すいふれ只を麻の鳴る哉  
 やし義姉こゝろ一鳴ゆりぬといふまゝさねといふ  
 しや者りれば義姉の紙よむ  
 これを志りて人々怒られしこそよ  
 ありをよむ

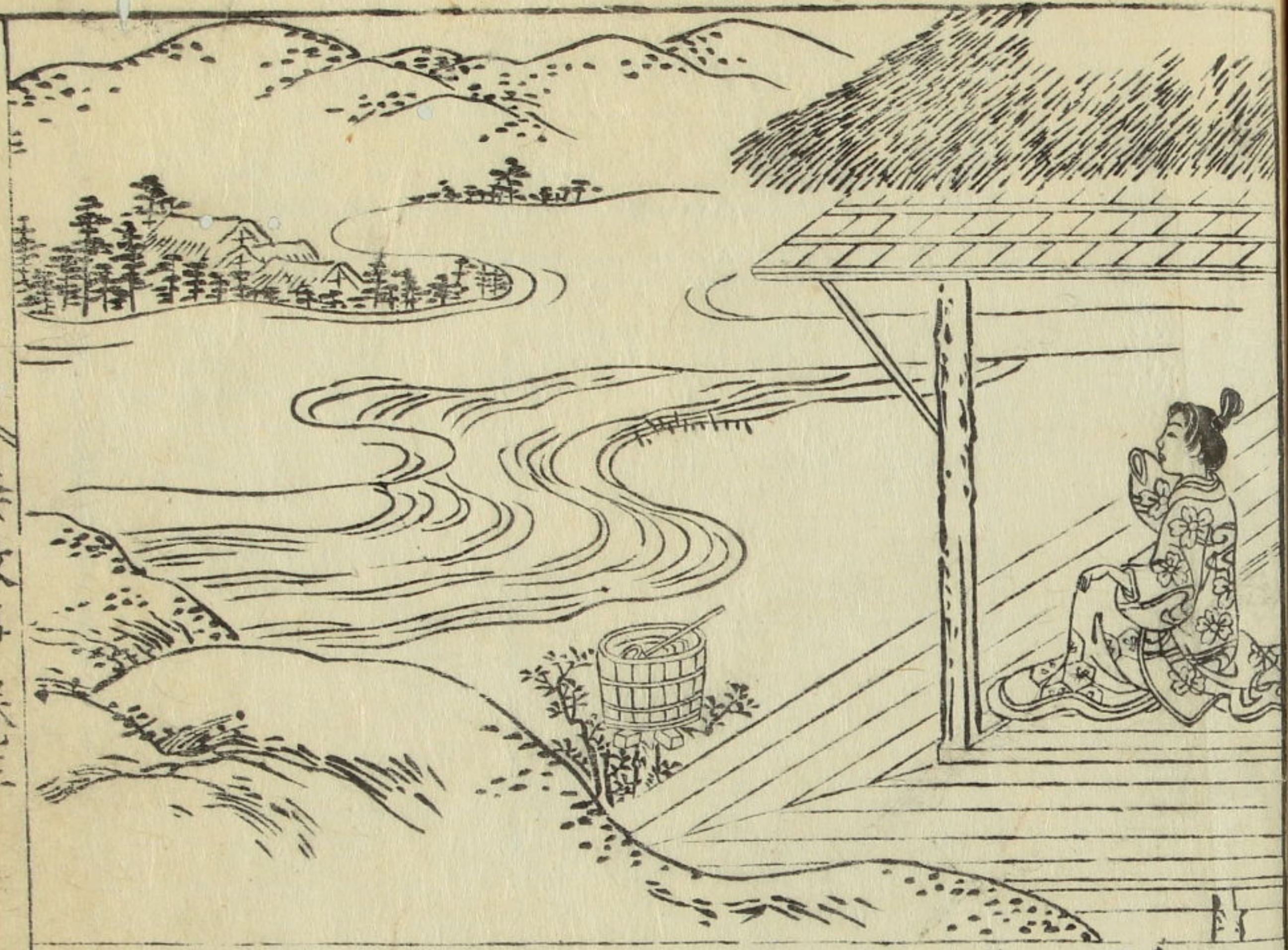
まがざりぬく<sup>あひれ</sup>夜<sup>あひれ</sup>うて<sup>やが</sup>珍<sup>し</sup>く<sup>あ</sup>糸<sup>いと</sup>を<sup>を</sup>追<sup>お</sup>せ<sup>い</sup>一<sup>ひと</sup>女<sup>め</sup>也<sup>なり</sup>  
かろく<sup>か</sup>り<sup>ろ</sup>ぎ<sup>り</sup>り<sup>り</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>

柏子<sup>かし</sup>成<sup>なり</sup>

ち<sup>ち</sup>和<sup>わ</sup>よ<sup>よ</sup>云<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>山<sup>やま</sup>の<sup>の</sup>ふ<sup>ふ</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>柏<sup>かし</sup>子<sup>し</sup>成<sup>なり</sup>の<sup>の</sup>へ<sup>へ</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>好<sup>この</sup>む<sup>む</sup>



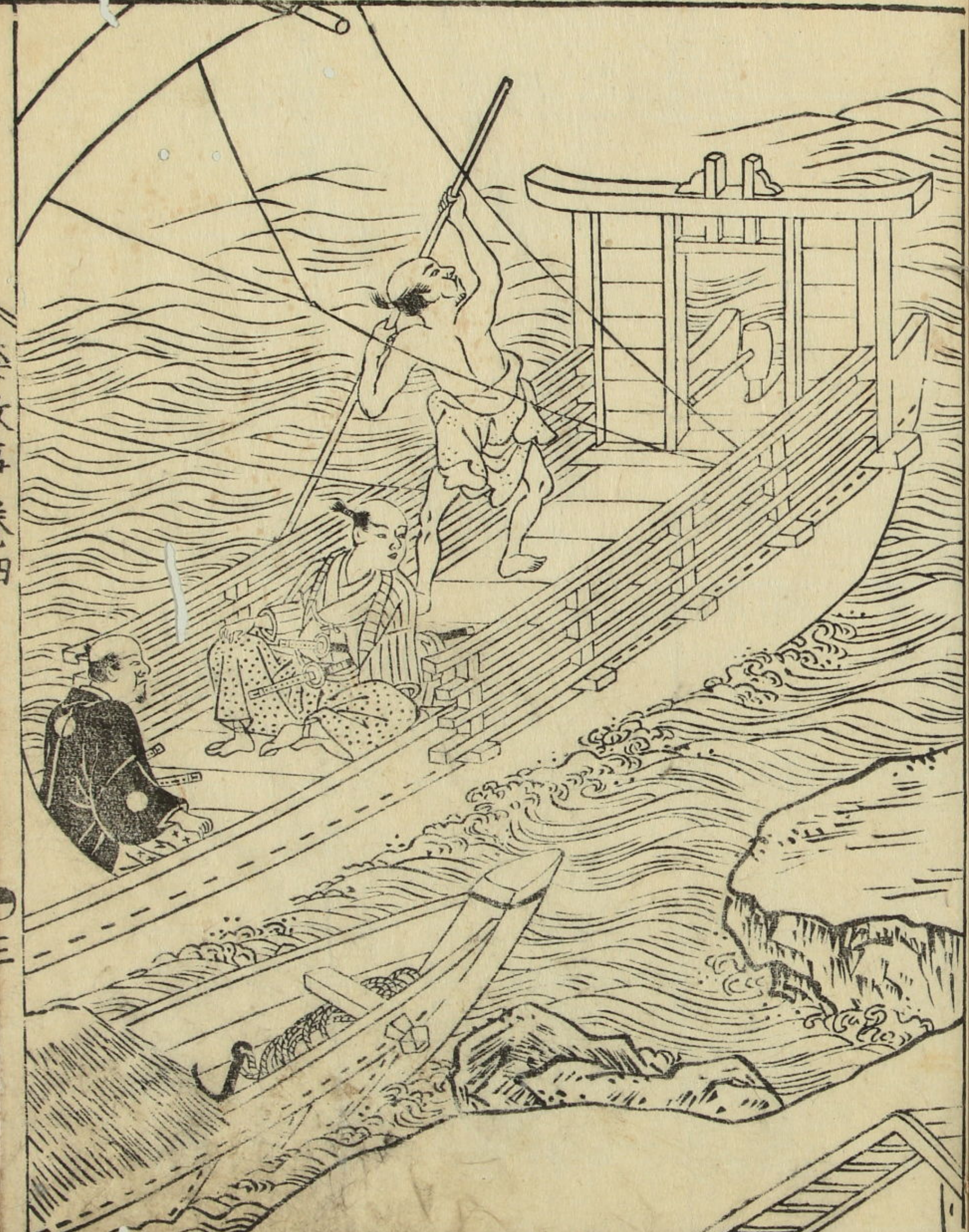
か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>月<sup>つき</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>ま<sup>ま</sup>  
せ<sup>せ</sup>よ<sup>よ</sup>ね<sup>ね</sup>ら<sup>ら</sup>ひ<sup>ひ</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>  
か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>月<sup>つき</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>ま<sup>ま</sup>  
せ<sup>せ</sup>よ<sup>よ</sup>ね<sup>ね</sup>ら<sup>ら</sup>ひ<sup>ひ</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>  
か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>月<sup>つき</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>ま<sup>ま</sup>  
せ<sup>せ</sup>よ<sup>よ</sup>ね<sup>ね</sup>ら<sup>ら</sup>ひ<sup>ひ</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>



か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>月<sup>つき</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>ま<sup>ま</sup>  
せ<sup>せ</sup>よ<sup>よ</sup>ね<sup>ね</sup>ら<sup>ら</sup>ひ<sup>ひ</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>  
か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>月<sup>つき</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>ま<sup>ま</sup>  
せ<sup>せ</sup>よ<sup>よ</sup>ね<sup>ね</sup>ら<sup>ら</sup>ひ<sup>ひ</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>  
か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>月<sup>つき</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>ま<sup>ま</sup>  
せ<sup>せ</sup>よ<sup>よ</sup>ね<sup>ね</sup>ら<sup>ら</sup>ひ<sup>ひ</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>



流きとせぬき我ら先姑のりた何まて成てし神ぞかろぬ  
 頃系引く破す者小足せられい大きにるみあさるれりりりなり  
 其後播別作の是あ房我はよび一生佛よはくへく目出  
 夜れりりをまげりりりり



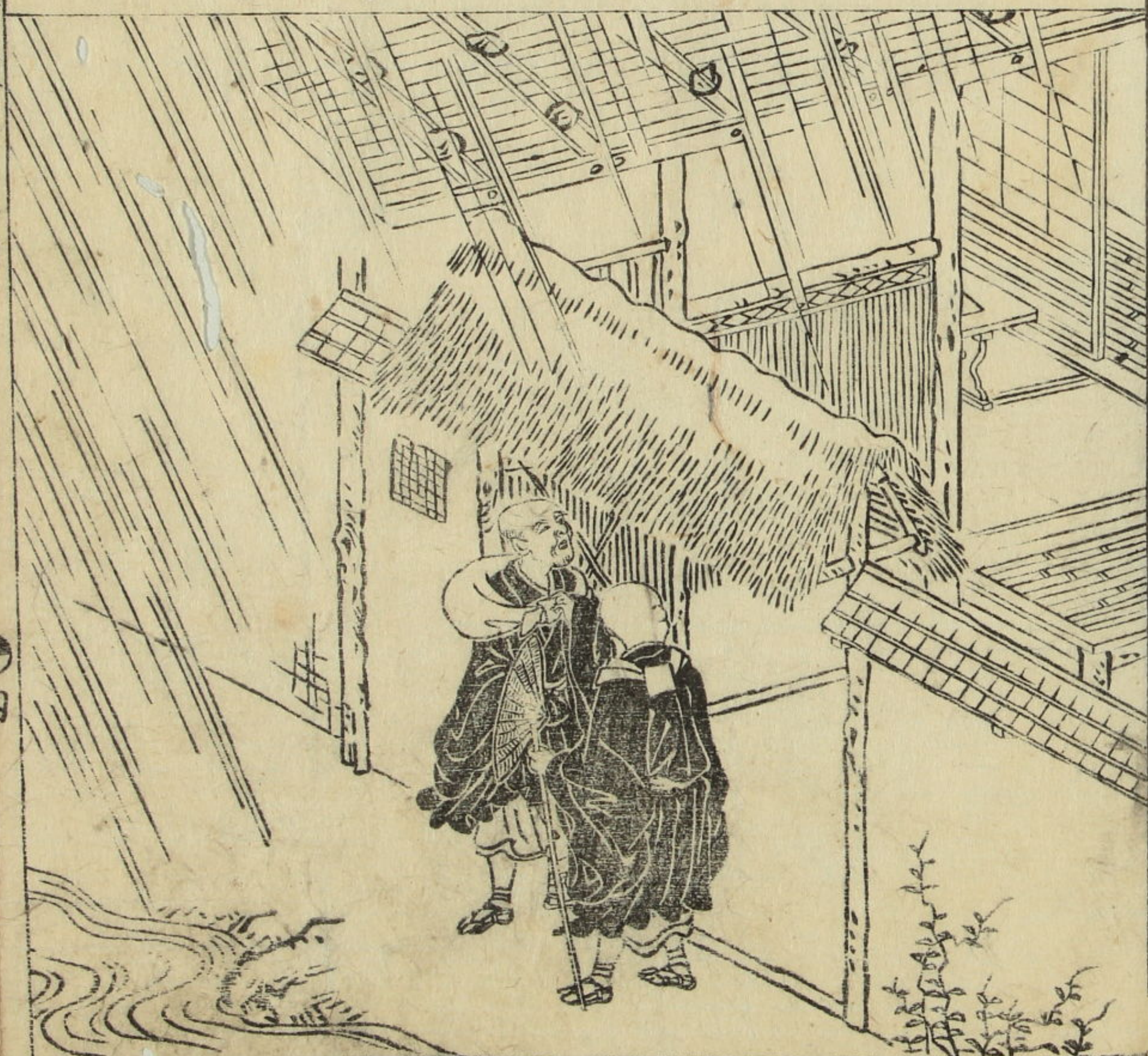
江口尼

尼ハカトハ揚別江口此遊あまあかり江口此遊あまあかり  
 法師一僧我付あまあま一僧我付あまあま一僧我付あまあま  
 子一僧我付あまあま一僧我付あまあま一僧我付あまあま  
 人をもまじひあまあま一僧我付あまあま一僧我付あまあま  
 改業とまぬ初あまあま一僧我付あまあま一僧我付あまあま  
 ちあはれ神性をあまあま一僧我付あまあま一僧我付あまあま  
 ながかへく思ひあまあま一僧我付あまあま一僧我付あまあま  
 ち行かんやあまあま一僧我付あまあま一僧我付あまあま



江口此遊あまあかり江口此遊あまあかり  
 法師一僧我付あまあま一僧我付あまあま  
 子一僧我付あまあま一僧我付あまあま  
 人をもまじひあまあま一僧我付あまあま  
 改業とまぬ初あまあま一僧我付あまあま  
 ちあはれ神性をあまあま一僧我付あまあま  
 ながかへく思ひあまあま一僧我付あまあま  
 ち行かんやあまあま一僧我付あまあま

ぬ少は修り風あまあま一僧我付あまあま一僧我付あまあま  
 ぬまげーかりれあまあま一僧我付あまあま一僧我付あまあま  
 ハまがまりな所あまあま一僧我付あまあま一僧我付あまあま  
 軒のりよまきあまあま一僧我付あまあま一僧我付あまあま  
 ぬまがりふき屋あまあま一僧我付あまあま一僧我付あまあま  
 のゆまりた之出あまあま一僧我付あまあま一僧我付あまあま  
 ち板二三所をあまあま一僧我付あまあま一僧我付あまあま  
 して屋のまをあまあま一僧我付あまあま一僧我付あまあま  
 を防がんやほ細あまあま一僧我付あまあま一僧我付あまあま  
 ちあはれ神性をあまあま一僧我付あまあま一僧我付あまあま  
 思ひ口まきあまあま一僧我付あまあま一僧我付あまあま



ぬ少は修り風  
 ぬまげーかりれ  
 ハまがまりな所  
 軒のりよまき  
 ぬまがりふき屋  
 のゆまりた之出  
 ち板二三所を  
 して屋のまを  
 を防がんやほ細  
 ちあはれ神性を  
 思ひ口まき



あががふせやを好まざりてふ  
凡あれを嗜くそり好まざり

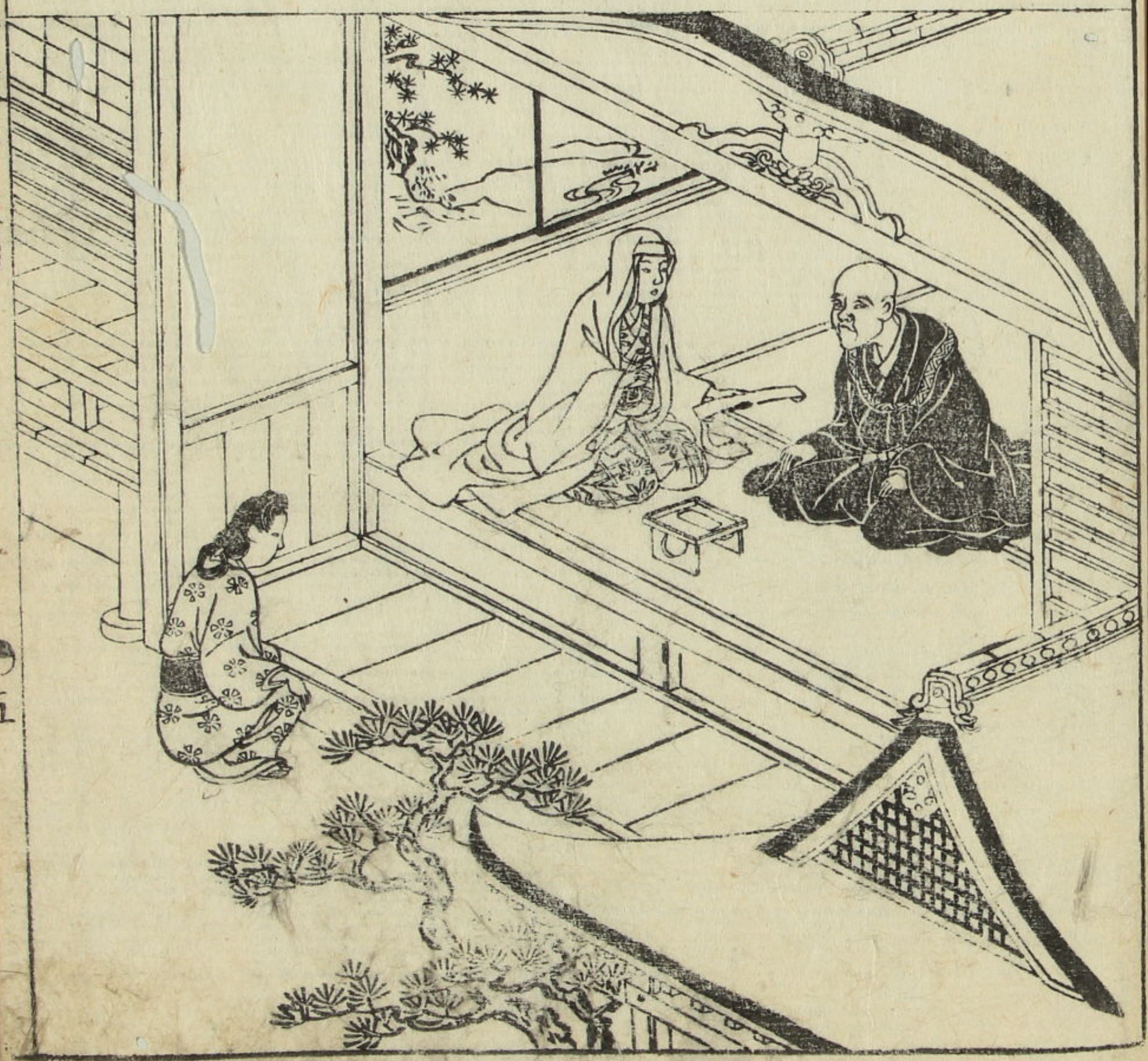
月いそれ面をとめきこしねあふま  
か、あへられは細新大まに感下てけ屋よ富り通  
あして明されりり同好信

あふあまきれぬ葉乃りやめ那  
新新これあふあてふ急がれく 死

細新いよく新新を我信を新新のせのへもか  
あふあて男わう同くバも紙信乃り同く遊  
やいひくくたふりを新しあてきりり

大磯虎女

虎女ハ大磯乃  
歌全の世女  
して骨我十命  
祐成がまわり  
まけかり時宗  
や足才又の仇  
を新ひらる後  
管根山のふ南  
の坊よ新く新  
成があふ佛外  
成修し和字に



汎福文をさげゑる近江川に輪舟をたて馬を  
祐成が虎よあつる正てるわらまより後ふ出立  
く燈別び光ちりゆく之より善徳をさるひけ  
あふすり年十九文なり是越歩人信儀にへく酒を  
あふとふるなり一徹よ欠女乃操をくそ器りな  
きあふさぎいへ急なりき新く欠魂をくりり  
りりやうひ供ふ

修實三女

修實三女 三人の娘越えり婦ハ舟内侍にわお舟内侍  
妹ハ藤原の院におなりける和歌を詠くその名  
をい後醍醐天皇御幸に日舟内侍お舟内侍出車り

そひなる者尔の氏に色又出供一のふ時りさう一  
奈花姫より越の氏にひそりふ是をそりのあは奈  
以後にて舟内侍をめされ奈をわらせりハあは花  
を備へしはまてあしと地りるせよ一の娘ひらりこれ  
いそふお下り

あつる乃まよりておさうりね

やつりまうりればお氏にあねをさす

あつる乃まよりておさうりね

やうこれよりれば帝大なるのでわうりせのひらり  
滅りあつるのし智いさかしとてつとけりね  
三女もやうりこれれば修實の三女とほり新り



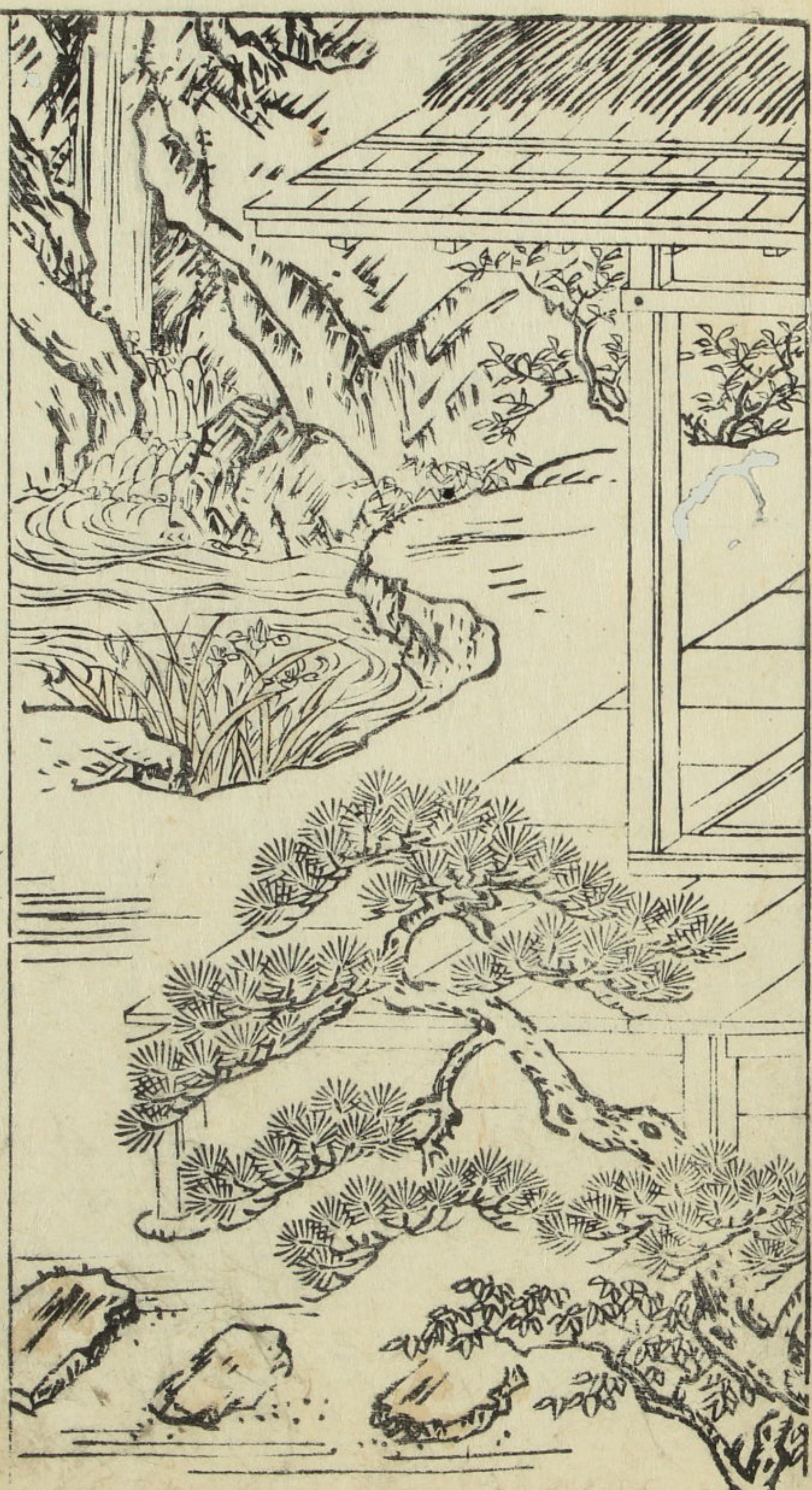
倭古事記卷四



倭古事記卷四

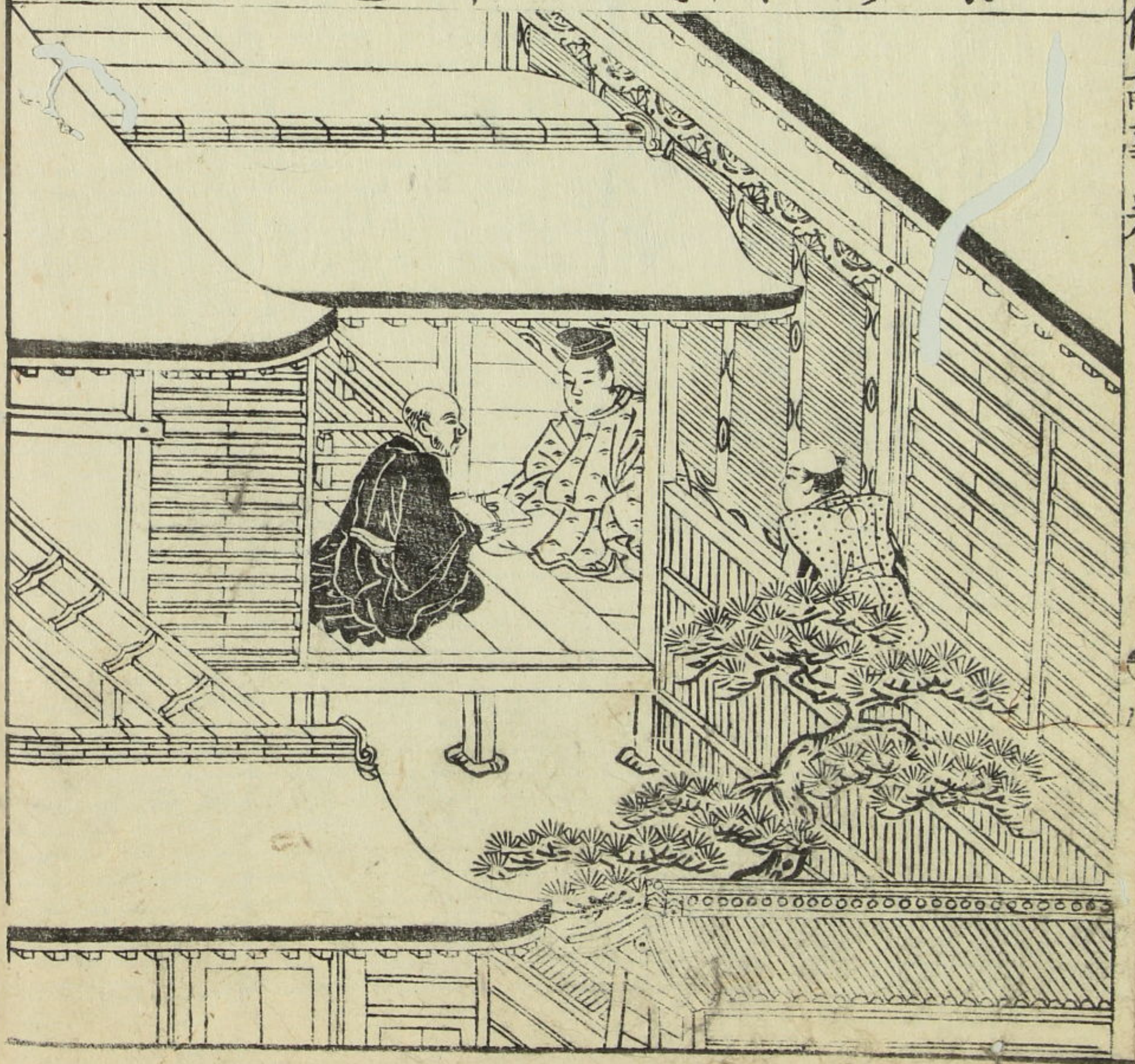
大伴 雲 直

大伴雲直の傳  
雲直は八國領事の地より  
生れし者也  
和歌歌詠に  
花海の翁を  
山吹の宗



雲直の傳  
雲直は八國領事の地より  
生れし者也  
和歌歌詠に  
花海の翁を  
山吹の宗

長明  
 鴨居の行合  
 の家乃氏人なり  
 和歌を好し管  
 弦小精一日精  
 きん事なほれ  
 けれど勅許なり  
 けなり世紙書  
 く名紙筆一留と  
 ふ言後は名紙の  
 めん字を下して



和歌の事なり自然にまかす辭しなりて和歌紙  
 ト其の事なりごとくを何なり  
 志代もそそく文より酒原小をさやうと書紙様ぞ

牡丹花

牡丹花ハ昔年親王にを縁ありて青柳と名づけ和歌  
 を好てあるく家祇にほくまの歌をよみて出る時ハ必  
 ず牛の糸別り牛の角を令酒しや酒を酒も酒も  
 一と笑へども耳文はつるなり一古柳ハ四時の花を  
 載て好酒を好て香紙を以て花を小併て云電と  
 一と云う云電の記

誠々風雅乃良人なり



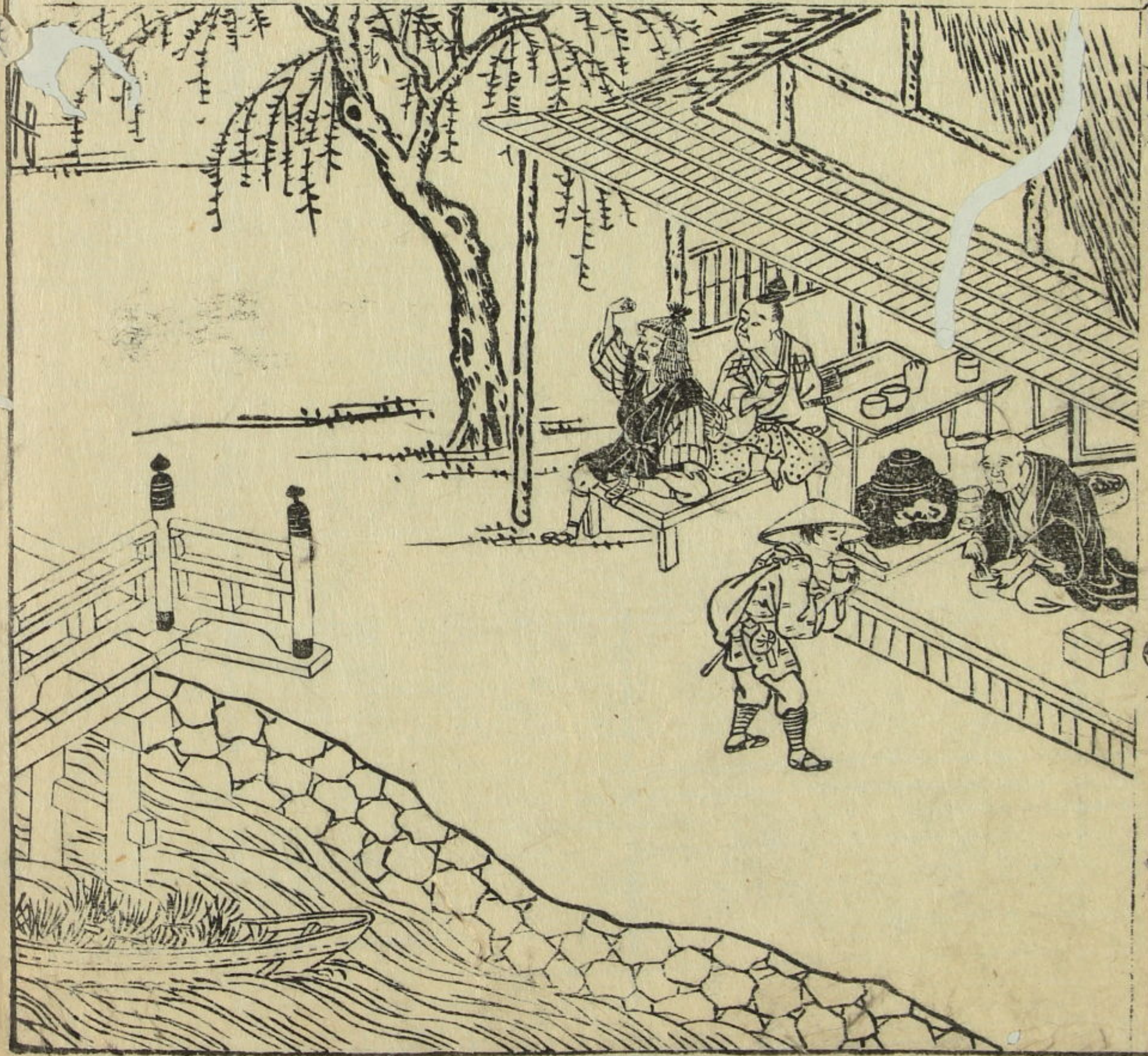
牛車



修古事卷四

通商茶店

山城の國に在り乃  
橋本と通商茶店  
此のあり茶店  
或は一人一人茶  
を納くは縁  
や一法心の人乃  
風俗おひより  
ゆくの物ごり或  
ゆるく生産の  
を納くは縁



そのあり  
の橋本と茶店  
ゆを業くは茶店  
此中央の欄を接  
へ通商が縁を納く  
吾儕も通商が茶  
店を納くは縁  
へのやと茶店  
上より茶店  
小勝まで橋本の此  
れをなぐさあり





菊池流

菊池乃水就為峰 止十系姑一ツりりけ山の溪  
 小菊多しそれありて清水なぐれ出ち傍をけえ  
 門前のくほ水を石台ゆへよままのなるありわりのひけふ

傳事



康頼

平次官康頼  
を平次官康頼の  
まゝおとすて  
取まはぬ後定  
まどく鬼界が  
しるし福さる居  
幸三年かり系  
老母阿つと  
成ふくまふれ  
解さぶらう千



のふき卒於海を

造りて成り片

けてぶらう

にもしわれあや

やれり小勝た

色ねらうとハ

ろりきゆ成

まごころハ  
あま留神乃

小舟一我ありと  
ねやふはげよ  
公年おゆりあ

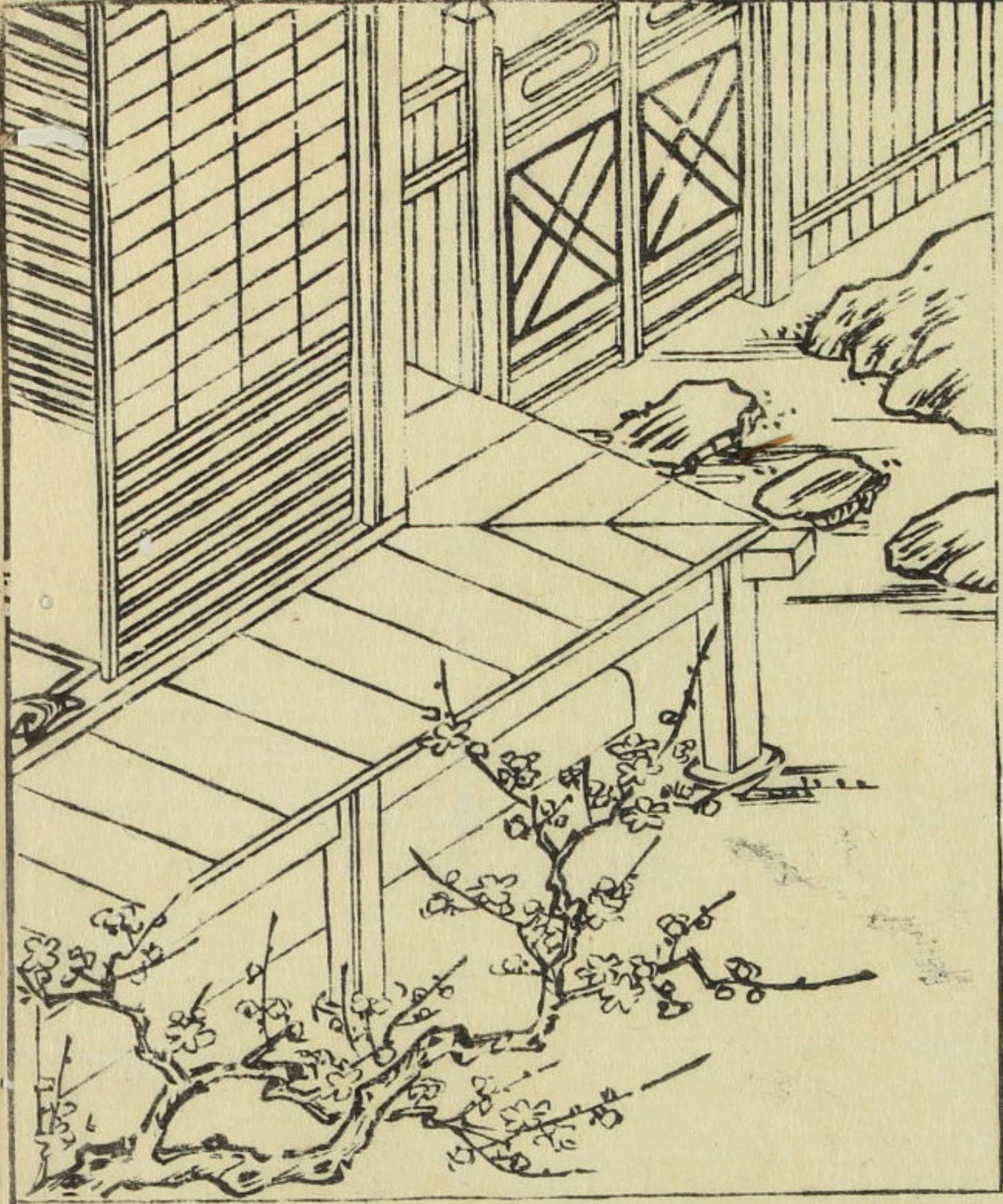
一つお卒於海  
はらうひく海  
を造りて成り  
片成り片成り  
はらうひく海  
を造りて成り  
片成り片成り



感ず今も幾多別後居よそとハナグーまの古史何り

通勝卿

中院通勝は先帝の勅勅致りぬひく細川玄吉



をこのと信のひらぐ  
笑文は笑ふ所のふら  
く後居成院の以字  
よ詩を揚つゝ勅免  
哉あゝるを約よ曰  
旅雁北飛残臘天  
今宵話舊思依然  
前身蘓武去来否



不断楼

勢別白子浦了ふ以揚おやアおきもり花のほごる  
名本阿かけ阿りいりくは子魚後七

一瞬居諸十九年

通勝のなを和乃

和歌

たむひきや 居は後を

をいひしを井了

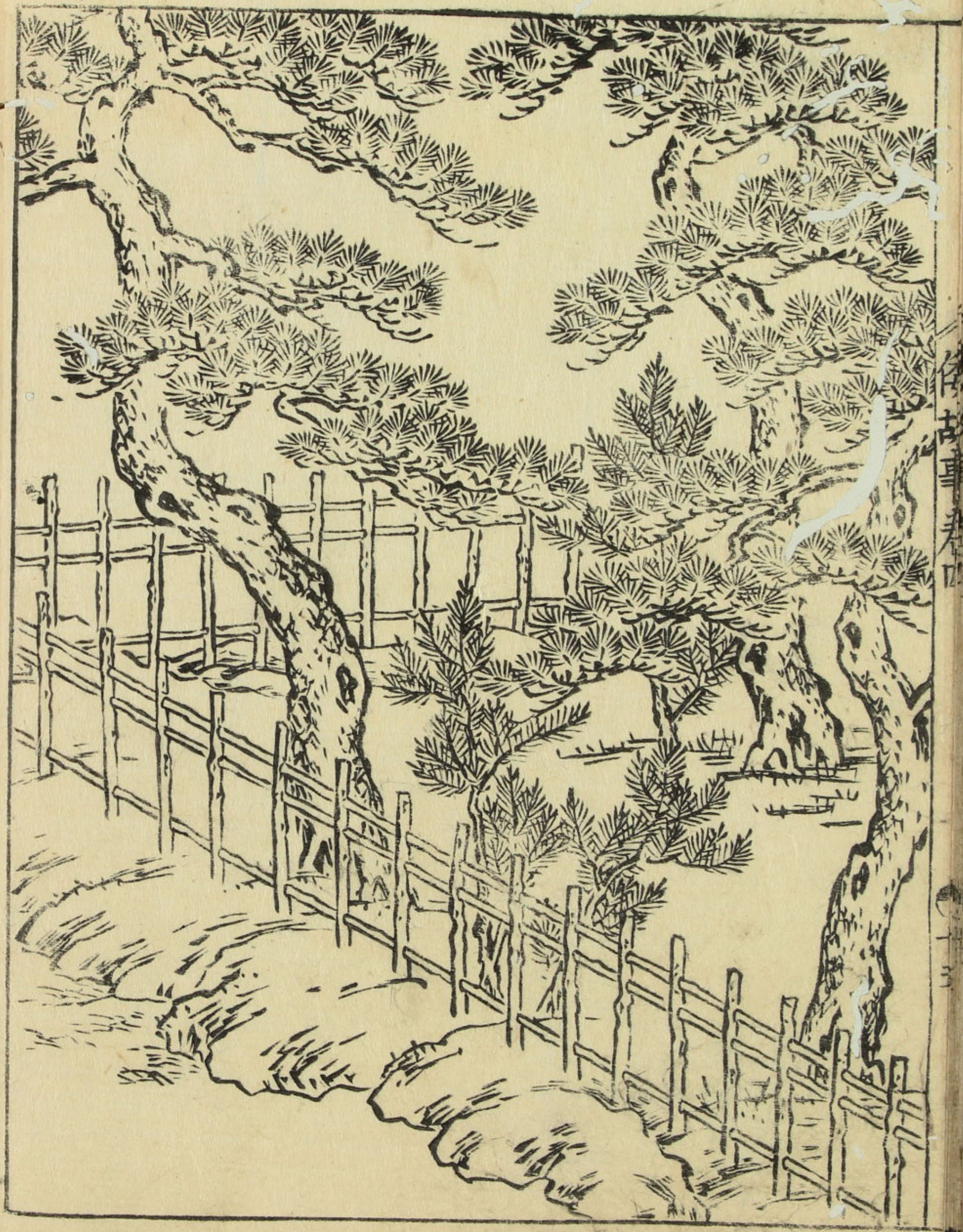
かい勇哉

あゝやハ





茶女草子 卷四



茶女草子 卷四

念佛橋  
 此の邊の玉谷郡  
 小島強阿の故  
 歌者わるとま  
 乃乃り川わわ  
 其の中より橋  
 橋を念仏橋と  
 しては來の人は橋  
 下を渡るに  
 河の水はわらわ



此の邊の玉谷郡  
 小島強阿の故  
 歌者わるとま  
 乃乃り川わわ  
 其の中より橋  
 橋を念仏橋と  
 しては來の人は橋  
 下を渡るに  
 河の水はわらわ

けりて海阿る  
やのふ

笠貝簑編

物初法脚流玉

降りるのひ

時海多ぐりた

風人百吹きさり

そのくまを海

中よ吹入りき

後けおよま貝

や簑編やん

生ややうり物初ま時く地るあ

あも明く笠もはき世うせれきかろ簑編き下り物

孤女

孤女ハ何女やいあう哉ーはるやく父母うたれく

おひきくゆらへぬ親の記をさふべき日して僧哉

後ぞ僧ありくまお乃何れも哉んそそ新りど

つとほみ出せべきやうも入へばれは僧何何れう

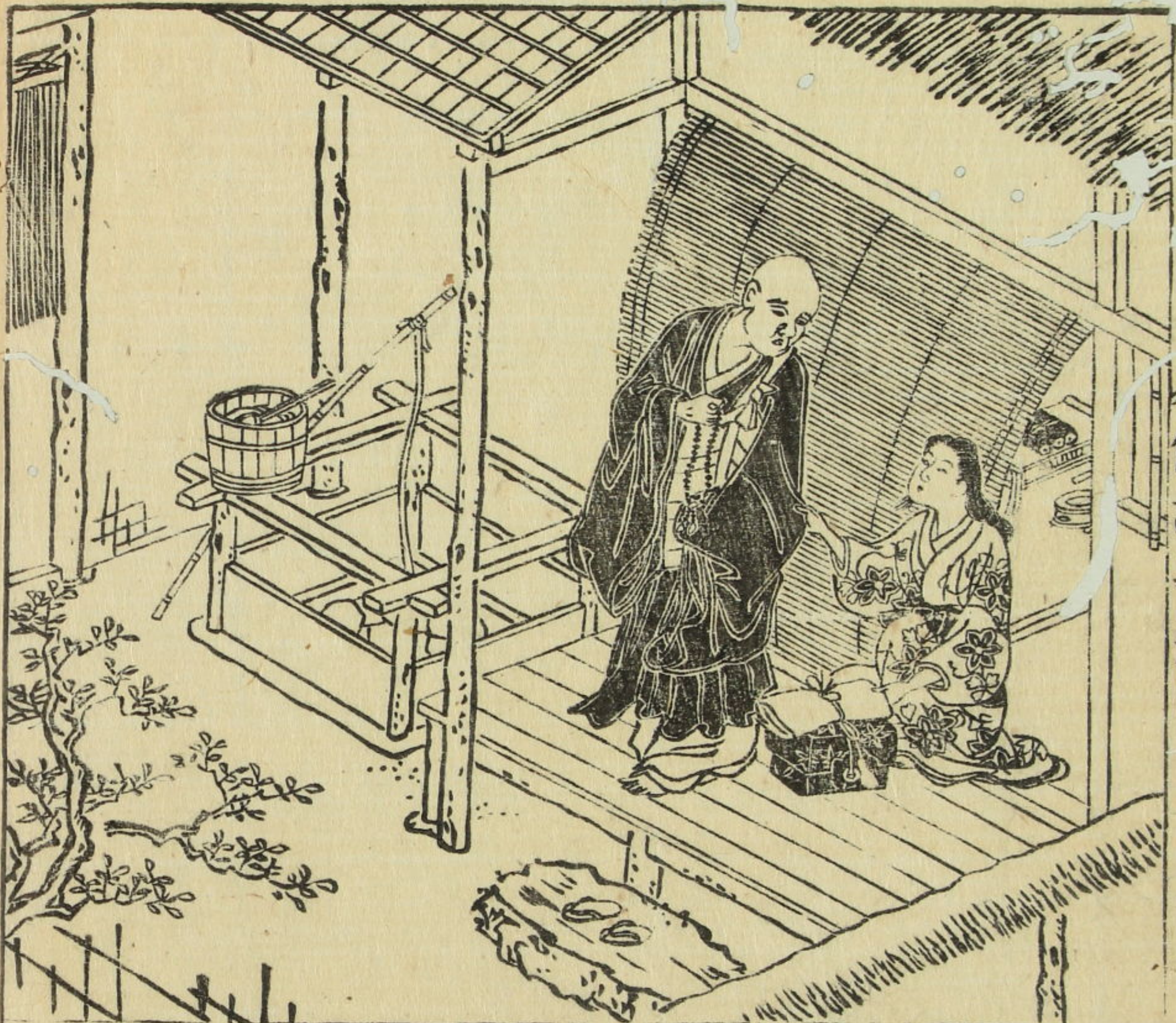
にもひ後ろすを急ぎさるやくき出りりうう簑編れりあり

物ひとつと耐後乃もおと哉布物ーいせわ

物ふれをみりうりもばこの伴うあ何りひきき

それお他も控へばうーく





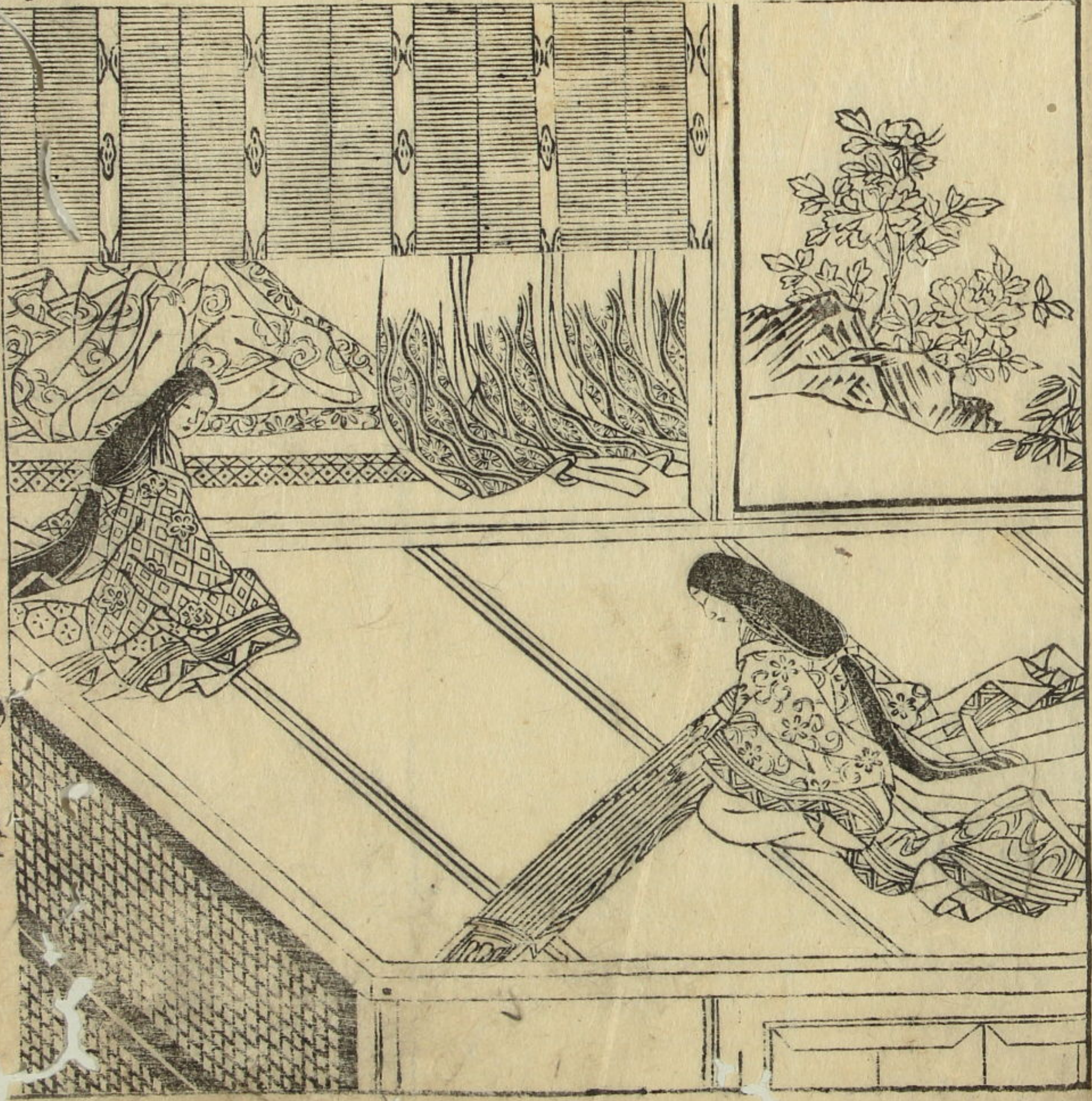
玉うづげのけい  
きりもよんざりさ  
ふたねやめがら  
かきと一終  
いし何れうこり  
ぶゆもやうこり  
くれがけ借りま  
をねし  
あられ  
り

貧女

七月十日の夕暮の身まりの日とて人皆父母兄弟一換  
のねは佛を修養とて乞を流まのりまのりまのり  
まづきき女何りりりれをねあんとまのりまのり  
只わねひあわりそをねをねとて小籠の田う  
入るまのりまのりまのりまのりまのりまのり  
おろりね何れれをまのりまのりまのりまのり  
あをまのりまのり

まのりまのりまのりまのりまのり  
あをまのりまのりまのりまのり  
まのりまのりまのりまのりまのり  
あをまのりまのりまのりまのり

此東門後乃  
 能強人の今  
 ありあつり  
 けりは東武  
 候めてけ女  
 房が候と  
 ひくろりれ  
 おもるれぬ名



木下  
 大正  
 四年  
 四月



作  
 古  
 事  
 卷  
 四





